とっとり弥生の王国　2021 Autumn

特集

続・倭人の真実

―青谷上寺地遺跡に暮らした人々―

巻頭

続・倭人の真実に寄せて
―倭人と渡来人―

Special contributions

○弥生時代研究の変革
―ヤポネシアゲノムと考古学―

○青谷上寺地遺跡出土人骨から何が見えてきたのか

○青谷上寺地遺跡出土人骨の時代背景

Columns

○倭人のプロフィール

○倭人の顔面装飾“黥面”

○コロナ時代の顔、弥生時代の顔

Brief reports

○青谷上寺地遺跡出土人骨の概要

○甦る倭人の素顔

「とっとり弥生の王国」へようこそ！

鳥取県には弥生時代の歴史を考える上でとても重要な遺跡がたくさんあります。中でも鳥取市青谷町にある「青谷上寺地遺跡」と、米子市と西伯郡大山町にまたがる「妻木晩田遺跡」は、弥生時代を代表する重要な遺跡として、国の史跡に指定されています。

鳥取県では、貴重な歴史文化遺産である青谷上寺地遺跡と妻木晩田遺跡を活用するため、「とっとり弥生の王国」という枠組みのもとに新たな価値の創出と情報の発信に取り組んでいます。そして、この二つの遺跡の調査研究を通じて、弥生時代の歴史や文化を学ぶとともに、史跡の楽しみ方を追求したいと考えています。

今回のシンポジウムは、2018年から鳥取県が国立歴史民俗博物館、国立科学博物館と共同で研究を進めてきた青谷上寺地遺跡出土弥生時代人骨の最新の知見を紹介する企画です。このシンポジウムを通じて、たくさんの方々と一緒に「とっとり弥生の王国」の魅力を共有できれば幸いです。

続・倭人の真実

―青谷上寺地遺跡に暮らした人々―

CONTENTS

巻頭

4 続・倭人の真実に寄せて ―倭人と渡来人― 清家 章

Special contributions

10 弥生時代研究の変革―ヤポネシアゲノムと考古学― 藤尾 慎一郎

16 青谷上寺地遺跡出土人骨から何が見えてきたのか 篠田 謙一・神澤 秀明・坂上 和弘

20 青谷上寺地遺跡出土人骨の時代背景 濵田 竜彦

Columns

9 倭人のプロフィール 北浦 弘人

26 倭人の顔面装飾“黥面” 岡野 雅則

27 コロナ時代の顔、弥生時代の顔 北 浩明

Brief reports

15 青谷上寺地遺跡出土人骨の概要

28 甦る倭人の素顔

TIME TABLE

とっとり弥生の王国プレミアムシンポジウム

続・倭人の真実 ―青谷上寺地遺跡に暮らした人々―

日時 2021年10月30日(土) 13:00～16:40　**会場** とりぎん文化会館 [小ホール]

13:00-13:10	開会	主催者代表挨拶
13:10-13:40	講演１	**「弥生時代研究の変革―ヤポネシアゲノムと考古学―」** 藤尾 慎一郎（国立歴史民俗博物館 教授）
13:45-14:15	講演２	**「青谷上寺地遺跡出土人骨から何が見えてきたのか」** 篠田 謙一（国立科学博物館 館長）
14:20-14:50	講演３	**「青谷上寺地遺跡出土人骨の時代背景」** 濵田 竜彦（鳥取県地域づくり推進部とっとり弥生の王国推進課）
14:50-15:00	休憩	
15:00-16:30	パネルディスカッション **「倭人の真実」** ●パネリスト　藤尾 慎一郎、篠田 謙一、濵田 竜彦 ●コーディネーター　清家 章（岡山大学大学院 教授）	
16:30-16:40	講評	
16:40	閉会	

主催／鳥取県　後援／文部科学省新学術領域研究「ゲノム配列を核としたヤポネシア人の起源と成立の解明」

「ヤポネシアゲノム」とは文部科学省科学研究費補助金新学術領域研究「ゲノム配列を核としたヤポネシア人の起源と成立の解明」の略称名。また、「ヤポネシア」とは長く奄美大島に暮らした作家の島尾敏雄氏が1960年代に提唱した用語。ラテン語で「ヤポ」は日本を、「ネシア」は島々を意味している。

○本誌はとっとり弥生の王国プレミアムシンポジウム「続・倭人の真実―青谷上寺地遺跡に暮らした人々―」のプログラム＆パンフレットである。

企画・編集
鳥取県地域づくり推進部文化財局
とっとり弥生の王国推進課

編集・デザイン
勝美印刷株式会社

本誌作成協力
青谷上寺地遺跡展示館
鳥取県立むきばんだ史跡公園

続・倭人の真実に寄せて

―倭人と渡来人―

Seike Akira
清家 章

清家 章　プロフィール
1967年、大阪府生まれ。岡山大学大学院社会文化科学研究科教授。専門は日本考古学。ヤポネシアゲノム研究計画B01（考古学）班研究分担者。著書に『埋葬からみた古墳時代 女性・親族・王権』（2018年 吉川弘文館）などがある。

■ はじめに

青谷上寺地遺跡から出土した古人骨は、出土したときから現在に至るまで驚かせることばかりである。100体以上の人骨がバラバラの状態で溝から見つかったことも衝撃的であったし（❶）、少なくない人骨に受傷痕が認められ（❷）、その中には女子供も含まれるとあっては（❸）、興味を抱かざるを得ない。

新学術領域研究ヤポネシアゲノム考古学班と古代人DNA班では、鳥取県の協力を得ながら青谷上寺地遺跡出土人骨の年代学的分析とDNA分析を進め、そこから青谷上寺地遺跡出土人骨と遺跡の研究にとどまらず、新たな弥生時代像を描き出そうとしている。くわしくは本原稿の後に掲載されているシンポジウム講師の方々の原稿を読んでいただければ良いが、その前に導きの糸として、「倭人の真実」を探るということの意味について私の考えるところと、青谷上寺地遺跡出土人骨分析に期待するところを記したい。

❶溝に散乱する人骨

❷銅鏃の刺さった寛骨

❸受傷痕のある女性の頭蓋骨

■「倭人」の成り立ち

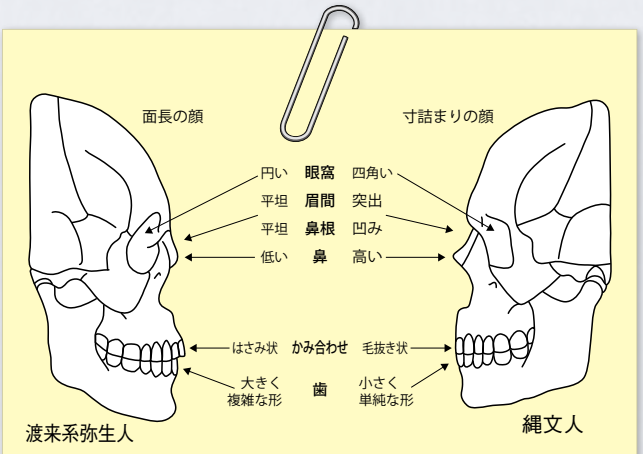
「倭人」の成り立ちは、古くから関心のあるところであって、考古学と人類学の黎明期から関心を集めた課題であった（本誌藤尾原稿「弥生時代研究の変革」10頁）。とくに縄文人と弥生人の関係については、長く深い論争が繰り広げられてきた。弥生時代は、本格的に稲作がもたらされた時代であり、稲作文化がその後の日本文化の基層となる文化であるだけに、その稲作文化の起源地と稲作文化を日本列島で展開した弥生人（注１）とは何者かという点に関心がもたれてきた。直接の稲作起源地は韓半島であることはすでに定説となり、稲作文化の担い手についてはさらなる関心が持たれていると言えよう。

しかも、縄文人と弥生人（とくに北部九州人）は、顔つきや体つきが大きく異なっていた（❹）。たとえば縄文人は低身長であって、顔は幅広で低顔、彫りの深い顔とされる。目の入る眼窩は四角いなどの特徴を持つ。一方で弥生人は縄文人に比して背が高く、顔は著しい高顔で、のっぺりした顔つきだなどとよく言われる。実際には地域差があって一概には言えないが、縄文時代には認められない特徴を持つ人が新たに現れたのは事実であった。このようなことから、稲作を伝え、展開した弥生人はどのような人々かという議論が行われてきたのであった。

これまでにあった説を簡単に紹介すると主なものには以下のような説がある（注２）。金関丈夫は渡来人の存在を認め、渡来人と縄文人の混血を経て弥生人が出現するという「混血説」を唱えた。その一方で、長谷部言人や鈴木尚は食事などの社会的変化で形質が変化するという「変形説」「小進化説」を主張していた。埴原和郎は、弥生時代から古墳時代にかけての大量の渡来人が日本列島に来たと考える「二重構造説」を唱える一方、少数の縄文人がいたところに少数の渡来人が来て、その後急激に人口が増加し、渡来系遺伝子を持つ人びとが増加したとする中橋孝博や田中良之らの説もある（田中2002、中橋・飯塚1993）。鈴木尚がその後「混血説」を認めるに及び、さらにはDNA分析が進む中で弥生人における渡来人の影響を否定する者は誰もいない。

その一方で、ヤポネシアゲノムの研究でも実施している炭素14年代法が明らかにしてきたように、弥生時代の始まりが紀元前８世紀から10世紀までさかのぼることが明らかになっている。弥生時代が以前考えられていた以上に長い期間を有することは、弥生人成立にかんするストーリーを再考する必要を迫っている。先に紹介した二重構造説や中橋や田中の人口増加のシミュレーションは炭素14年代法が本格的に導入される以前のシミュレーションだからである。

❹縄文人と渡来系弥生人の頭蓋骨（横顔）



篠田2018「DNAが解き明かす人類による日本列島への旅」『歴史REAL 日本人の起源』洋泉社を参考に作成

■「倭人」とは何か

これまでの「倭人」研究は、弥生時代早期から中期までに焦点を当てた研究が多かったといえよう。しかし「倭人」の成立は、弥生時代の中期に完成しているものなのだろうか。そもそも「倭人」とは何なのであろうか。

いうまでもなく「倭人」とは中国王朝側が日本列島に住む人々を指して、やや差別的な意味を込めてつけた呼び名である。「倭人」が文字として中国の記録に残る最初の例は『漢書』地理志燕地条である。有名な「楽浪海中に倭人あり。分かれて百余国となる。歳事を以て来り献見すといふ。」の一節である。紀元前１世紀のことで「倭人」が漢に定期的に朝貢していたことを記している。この呼び名は、日本側が「日本」という国号をつけるまで使用されたようで、少なくとも

古墳時代までは使用される。

「倭人」「倭」という語は中国側からみて、日本列島の「地域名称」・「民族」あるいは「国号」として用いられた。ただ、中国王朝側が弥生人なり古墳人の容姿（形質）の細かな違いを認識していたとは考えがたいし、民族として重要な「われわれ意識」の共有を確認しているわけでもない。すなわち、中国側が「倭人」と呼ぶのは日本列島に住む人びとを指しているだけで、厳密な意味で民族でないことになる（注３）。少なくとも「倭人」は弥生人と同時に古墳人も含んでいる。

そのように考えると、「倭人」研究は弥生時代だけにとどまらず、古墳人も併せて研究する必要がある。埴原和郎のような大量渡来説にしろ、田中良之や中橋貴博の少数渡来説にしろ、縄文人あるいは縄文系の人びとに渡来人の遺伝子が影響して弥生時代以降の人びとの形質が変化しているというのであれば、弥生時代後期以降の混血や渡来人の遺伝子の影響を見ていくべきであろうと考える。

というのも、「倭人」と中国あるいは韓半島諸地域に住む人びとは長期に交流していたし、交流する必然性がお互いに存在したからである。

■ 先進文化と鉄を求める「倭人」

稲作もさることながら、弥生時代には青銅器・鉄器が導入される。それら金属器を製作する技術はもちろん、原材料も「倭人」は中国や韓半島に求めていた。とくに製鉄をする技術が日本列島にはなかなか入ってこず、６世紀までは鉄を韓半島に求めていた。『魏志』東夷伝弁辰条には「国、鉄を出す。韓・濊・倭皆従って取る」とあり、この記載からは、「倭人」が韓半島に鉄資源を求めていたことがわかる。弥生時代後期以降は完全な鉄器社会になるので、鉄資源は当時の「倭人」にとって社会あるいは生活を維持するのに必須の資源であった。そのため「倭人」が韓半島に渡ることもあったのだ（❺）。

弥生時代に硯と考えられる石器が存在することが近年盛んに指摘されている。文字の導入はもちろん大陸からであろうし、それを伝えたのは渡来人であったろう。とくに古墳時代に入ってからは、中期以降、須恵器・馬や先述の製鉄技術の導入、金工技術など大陸からの新たな技術が日本列島にもたらされる。それには数多くの渡来人が関わっていたことは、日本書紀や古事記の記述、あるいは発掘調査の成果などから明らかである。その渡来人の数は少なくなかったと考えられる。記紀は阿知使主・王仁・天之日矛ら知識人や王族を含んだ人びとの招来・渡来を伝えている。彼らは単独でなく、多くの同胞を連れて来たであろう。とくに日本書紀では阿知使主が黨類（ともがら）十七県を率いたという大量渡来を伝えている。もちろん記紀にある記述はすべて真実とはいえず、伝説的なそれや誇張もあろうが、渡来人が日本列島にやってきてその技術革新に貢献したであろうことは事実なのである。

❺青谷上寺地遺跡の中国・韓半島製鉄器

■ 東アジアにおける動乱と渡来人

中国や韓半島側に住む人びとにとっても、日本列島へ移住する理由が多分に存在していた。東アジアにおける動乱である。そもそも、「倭人」が漢に朝貢を行うようになったきっかけは、紀元前108年韓半島北部にあった衛氏朝鮮を漢が滅ぼし、真番・臨屯・楽浪・玄菟の四郡を設置したことによる。漢の支配が韓半島の一部に及んだことにより、「倭人」も漢と通行し始めたのである。漢の侵攻があったことで衛氏朝鮮にいた人々は流民化せざるを得ないし、漢の影響を嫌って南下する者もいたであろう。この後も、韓半島の状況は安定しない。漢を含めそれ以降の中国王朝の盛衰が、韓半島の安定に大きく影響したのである。また、韓半

❻２世紀の東アジア

日本第四紀学会ほか編 1992『図解・日本の人類遺跡』東京大学出版会 109頁をもとに作成

島南部は数十の小国に分かれて争っていた（森2006）。

『後漢書』に「倭国大乱」、『魏志』倭人伝に「倭国乱」と書かれた後漢の桓帝・霊帝の頃のころ、後漢の勢力は衰退し、韓半島の支配拠点である楽浪郡は高句麗（こうくり）の攻撃を受け弱体化する。そのため、楽浪郡とそれに所属する県の住民は韓族の諸国に流入したという（森2006）。

古墳時代に入っても、韓半島では、高句麗・新羅（しらぎ）・百済（くだら）・加耶（かや）諸国が覇権を争っていた。時には国の王が戦死するような激しさであった。とくに高句麗が北方民族や中国王朝の干渉を嫌って南下政策をとるとその他の国々は北から圧迫を受けることとなる。そうした激戦の中で、新羅・百済・加耶諸国は外交政策を有利にすべく倭と通好を求めたのであった。その中で人の往来がうまれる。ヤマト政権から工人の派遣を依頼されることもあれば、戦乱を嫌って日本列島に来る者もいたのである。

このように中国や韓半島からの渡来は一過性ではなく継続的にあるいは断続的に弥生時代から古墳時代まで存在していたのである。

さらに渡来人については、より具体的な中身を追求していく必要がある。一口で渡来人と言ってもその故地はいずこなのか。韓半島の北部なのか南部なのか、あるいは中国のいずこかなのか。私たちは渡来人、とくに弥生時代の渡来人は韓半島由来だと考えがちであるが、先に記したように中国王朝の弱体化が弥生時代にはあったのであり、とくに楽浪郡はその影響を強く受けた。流民化した楽浪郡治下の漢族が南下し、日本列島に来たことは十分に考えられるし、いったん韓半島南部に落ち着いた後、日本列島に渡来した中国系渡来人もいた可能性が指摘されている（西本1989）。

さらに東西に長い日本列島では、渡来人の影響は地域によって異なるであろう。これらを解き明かしていかなければ、弥生人あるいは「倭人」の実像は見えてこない。

■ 青谷上寺地遺跡出土人骨に期待するもの

本誌濵田原稿（「青谷上寺地遺跡出土人骨の時代背景」20頁）にあるように、青谷上寺地遺跡出土人骨の大部分は、２世紀第３四半期に属する。それはまさに桓帝・霊帝のころに相当する。日本列島で倭国大乱・倭国乱があったころであり、韓半島で動揺があった時期でもある。

本誌篠田原稿（「青谷上寺地遺跡出土人骨から何が見えてきたのか」）では青谷上寺地遺跡出土人骨のDNA分析の概要が記されており、ミトコンドリアDNAの多くが渡来人由来であったという。その一方でY染色体DNAは縄文人が持つものに由来するものがあるという。弥生時代後期に属する彼・彼女らの渡来系のミトコンドリアDNAはいつ、どこからもたらされたものであろうか。

私は「倭人」の成り立ちは長期的視点からも考えていくべきだとした。青谷上寺地遺跡出土人骨は弥生時代から古墳時代への移り変わる時期に所属すると同時に、日本列島と韓半島の両方で社会状況が不安定化している時期のそれでもある。新たな渡来人が流入してきている可能性のある時期なのだ。このようなことから長期的視点による「倭人」の成り立ちを考える上で、青谷上寺地遺跡出土人骨はきわめて重要な資料と言えるのである。殺傷人骨を多く含み、「乱」を想起させる資料だけにその重要性はなおさらである。

（注１）本稿では「縄文人」「弥生人」という語を用いているが、本来は「縄文時代人」「弥生時代人」と称すべきかと考えてい

る。弥生時代に日本列島に共住していた人びとは複数のハプロタイプを持つ人びとが存在し、時期と地域によっては文化的背景も異なる集団が併存していたと考えるので、まずは時期的に区分し、その中にどのような集団がいるかを明らかにすべきだと考えているからである。

（注２）以下の人類学の諸説をまとめるに当たっては中橋1996と田中2002を参考にした。

（注３）さらに厳密に言うと中国王朝側が考える「倭」の範囲は広くても九州から東日本であろうし、その範囲も時期によって異なるであろうから、日本列島に住む人びと全体を「倭人」と認識していたわけではないことも重要である。

参考文献

田中良之 2002「弥生人」佐原真編『古代を考える　稲・金属・戦争―弥生―』吉川弘文館

中橋孝博 1996「古人骨から探る日本人のルーツ」『人間史をたどる　自然人類学入門』朝倉書店

中橋孝博・飯塚　勝 1998「北部九州の縄文～弥生移行期に関する人類学的考察」『Anthropological Science（JapaneseSeries）』106巻１号

西本昌弘 1989「楽浪・帯方二郡の攻防と漢人移民の行方」『古代文化』第41巻第10号

森　公章 2006『東アジアの動乱と倭国』吉川弘文館

青谷上寺地遺跡年表

西暦	時代		青谷上寺地遺跡	日本列島	中国大陸・朝鮮半島	中国	朝鮮
	縄文時代	晩期				春秋戦国時代	青銅器時代
BC.500				日本列島に水稲耕作が広まっていく			
BC.400		前期					
BC.300			集落の形成が始まる				初期鉄器時代
BC.200			管玉の生産が始まる 卜骨による占いが始まる		BC221 秦の始皇帝 中国を統一 BC202 劉邦、漢王朝をたてる	秦	
BC.100				このころ、倭、百余国に分かれる（『漢書』地理誌）	BC108 漢、朝鮮半島に四郡（楽浪、玄菟、真番、臨屯）を設置	前漢	
	弥生時代	中期	大陸製鉄器がもたらされる 勒島式土器がもたらされる 星雲文鏡がもたらされる 飛砂により東側区画溝が埋没する	妻木晩田遺跡の集落形成が始まる			
AD. 1				妻木晩田遺跡（洞ノ原地区）に環壕、四隅突出型墳丘墓が造られる 57 奴国王、後漢に使いを送り、金印を授かる（『後漢書』東夷伝）	8 王莽、新をたてる 14 王莽、貨泉の鋳造を始める 25 光武帝即位（後漢の始まり）	新	原三国時代
			中心域が東に拡大し三方を溝で区画されるようになる				
AD.100		後期	木製容器の生産が盛んに行われる	107 倭国王帥升、後漢に使いを送る（『後漢書』東夷伝）		後漢	
			殺傷傷のある人骨が溝に大量に埋められる	妻木晩田遺跡の住居数が最も多くなる（集落の最盛期） 180頃 倭国乱れる（『三国志』魏志倭人伝）	184 黄巾の乱起こる 204 頃 公孫康、朝鮮半島に帯方郡を設置		
AD.200				239 女王卑弥呼、魏に使いを送る 卑弥呼に「親魏倭王」金印紫綬、銅鏡100枚を与える（『三国志』魏志倭人伝）	220 曹丕、魏をたてる（後漢の滅亡）	魏呉蜀	
		終末期					
AD.300	古墳時代	前期			313 高句麗が楽浪郡を滅ぼす		三国時代
AD.700	奈良		集落が衰退する 官道・条里地割が造られる			唐	新羅

鳥取県埋蔵文化財センター 2017『弥生の港湾集落　青谷上寺地遺跡』より転載・一部改変

COLUMN

倭人のプロフィール

Kitaura Hiroto
鳥取県地域づくり推進部文化財局
とっとり弥生の王国推進課 青谷上寺地遺跡整備室 室長 北浦 弘人

とある女性に自分の恋人のことを語ってもらった。「私の彼、趣味はスキューバダイビングで、好きな食べ物はシーフードとサラダ。髪はロン毛を括ってて、ファッションはあんまりイケてないんだけど、タトゥーを入れてる。靴はきらいみたいで、いっつも裸足になってる。地元の先輩を尊敬してるんだけど、道で会うとすごいビビってる。先輩の命令は絶対なんだっていっつも言ってる。お酒が大好きで、酔うとダンスが始まるし、手づかみで食べたり、水に飛び込んだりでパリピみたいに大騒ぎするの。スピリチュアルなことが大好きで、占いの結果がすごく気になるみたい。どこに遊びに行くかも占いで決めてるの。ちょっと優柔不断かも。案外まじめで、警察のお世話になるようなことはしたことないみたい。そんな彼なんだけど、どうやら私以外にも彼女がいるみたい。二股、ひょっとして三股かけられてる？私は彼一筋なのに。」

義理に厚く、悪いことはできないが、破天荒で浮気者、大切な恋人を振り回しているかのような彼氏。この人物のプロフィールは、実は弥生時代の男性像をもとに創作したもの。倭国の風土や文化、社会などを紹介した中国の歴史書「魏志倭人伝」に描かれた倭の男性の姿について、現代風にアレンジして遊んでみた。こうしてみると現代の日本人の中にも、弥生時代の男性に通じるような性分の持ち主がいそうである。アレンジの根拠は、以下のとおり魏志倭人伝の記述の中にある。

「スキューバダイビングとシーフード」…倭人は盛んに水に潜って魚や貝を捕っていた、「サラダ」…倭人は年中生野菜を食べていた、「ロン毛を括る」…倭の男子は頭髪を縛って髷を結っていた、「いけてないファッション」…質素ないでたちで簡素な着物を着ていた、「タトゥー（入れ墨）・裸足・酒好き・手づかみの食事・旅行に行く時の占い」…すべて魏志倭人伝中に記載あり、「先輩へのビビり」…下戸（身分の低い者）が道で大人（身分の高い者）に会うと、後ずさりして両手を地につき、大人に対する恭敬を表していた、「酔うと踊り出して水に飛び込む」…倭人の葬儀の様子、「まじめで品行方正な人物像」…倭人は盗みをせず、訴訟ごとも少ない、「彼氏の浮気」…下戸は２、３人妻帯した、「一途な彼女」…倭の女性は身持ちが堅い…。遊びが過ぎるとお叱りを受けるかもしれないが、現代の我々日本人が、二千年近く前の倭人の人となりを理解するのは、さほど難しくないのかもしれないと思えてくる。

青谷上寺地遺跡からは、倭人の男女の脳が出土している。いずれの脳も前頭葉の部分で、意志や感情、行動を司る部位である。脳の持ち主のプロフィール形成には、この部位が大いに関与している。脳科学が飛躍的に進歩した未来において、これらの脳が分析され、倭人の性格や思い、恋心までもが解明されないかと、夢想する。

魏志倭人伝から約350年後に編纂された中国の歴史書「隋書倭国伝」も、倭人について語っている。この書に次のようなくだりがある。「男女相悦者即為婚」（男女はお互い好きになると結婚する）。倭人は両性の合意に基づく恋愛結婚であったと解するが、上述のカップルは、果たしてこの先幸福になれるのか、気になるところだ。

弥生時代研究の変革

―ヤポネシアゲノムと考古学―

Fujio Shin'ichiro
藤尾 慎一郎

藤尾 慎一郎　プロフィール
1959年、福岡県生まれ。国立歴史民俗博物館教授。専門は先史考古学。ヤポネシアゲノム研究計画B01（考古学）班研究代表者。著書に『日本の先史時代　旧石器・縄文・弥生・古墳時代を読み直す』（2021年 中公新書）などがある。

■ 考古学と人類学のコラボ

日本の考古学は、明治時代に東京帝国大学理学部人類学教室の人びとを中心に始められたということもあって、以前から人類学との垣根を越えた研究が盛んであった。

そのため人類学の成果と考古学の成果は時に協調し、時に意見を違えながら、発達してきたといってもいいだろう。

本日のテーマである弥生時代のはじまりと弥生人の起源に関する研究も例外ではない。いや、むしろ弥生時代ほど考古学と人類学との学際研究の歴史が長い先史時代はないといっても言い過ぎではない。

そもそも弥生研究のはじまりからしてそうである。明治時代に見つかった弥生式土器の研究は、現代日本人の祖先が使っていたものなのか、先住民（縄文人）が使っていたものなのかという人種論争から出発した。

また大正時代には、早くも日本人の起源をめぐって混血説と移行説という論争が始まった一方で、考古側では、大陸から水田稲作を携えてきた人びとが使っていた土器が弥生式土器であり、日本人の祖先であるとする、鳥居龍蔵の「固有日本人論」が登場している。

戦後になって、金関丈夫が渡来人の存在と、渡来人と土着の人びととの混血によって渡来系弥生人が誕生するという「混血説」を提唱すると、考古側でも春成秀爾が、渡来人と土着の人びとが共存していたことを、弥生前期初頭における縄文系の土器（夜臼（ゆうす）式）と弥生系の土器（板付（いたづけ）Ⅰ式）との共伴現象の背景に読みとろうとした。

90年代になると、分子人類学が進展した結果、埴原和郎が弥生時代から７世紀までの間に、延べ100万人の渡来人がやって来たという、二重構造論を発表した。

この説を受けて考古側では田中良之が、住居跡の増加現象を利用して渡来系弥生人の人口増加率シミュレーション研究で応え、それほど多くの渡来人が来なくても、水田稲作民の年率1.3％という高い人口増加率をもってすれば、前期末以降に渡来系弥生人が多く見られることを説明できるとした。

ちなみに、水田稲作が始まった頃に渡来人がどのくらいいたのかについての目安として、弥生開始期の甕組成の中に占める韓半島系の甕の比率が使われ、渡来人の割合は約10％という数字が存在した。

しかし21世紀初頭、今度は考古側が、水田稲作のはじまりは500年早かったという説を発表し、年率0.8％の人口増加率でも前期末における渡来系弥生人の急増現象を説明できるという説が発表された。

そして現在、考古学と分子人類学は、DNA分析結果を武器に新しい学問の地平を切り拓こうとしている。本日はこの内容について報告する。

■ 土器の系統差とDNAとの関係

篠田謙一氏らの分析によって、伊勢湾沿岸地域においては遠賀川（おんがかわ）系土器を使用する渡来系弥生人のDNAと、条痕文（じょうこんもん）土器という縄文系の土器を使っていた在来系の採集・狩猟民のDNAが異なっていたことが明らかになった。

以前から土器の系統差は、土器を使用する人びとが在来系か外来系という違いを反映しているのではないかという予想があった。篠田らの研究成果は、DNA

も異にしていた可能性を示唆するものである。

まだ伊勢湾沿岸地域では数例しか確認できていないものの、もし土器の系統差とDNAの違いが関係する現象が、他の地域でも見られるとすれば、どういうストーリーが描けるのであろうか。大胆に推定してみよう。まず考古学的な基礎知識をおさえておく。

■ 土器と集団の関係

九州北部で水田稲作が始まる前、伊勢湾沿岸地域より西の地域には、突帯文（とったいもん）土器と呼ばれる縄文土器が広がっていた。

調理用の突帯文甕や粗製深鉢、盛付用の脚付鉢、浅鉢という土器から構成される土器群で、粘土紐を１本から２本、口縁部や胴部にめぐらすように貼り付けて、粘土紐上に刻目を施文する甕を標識とする。

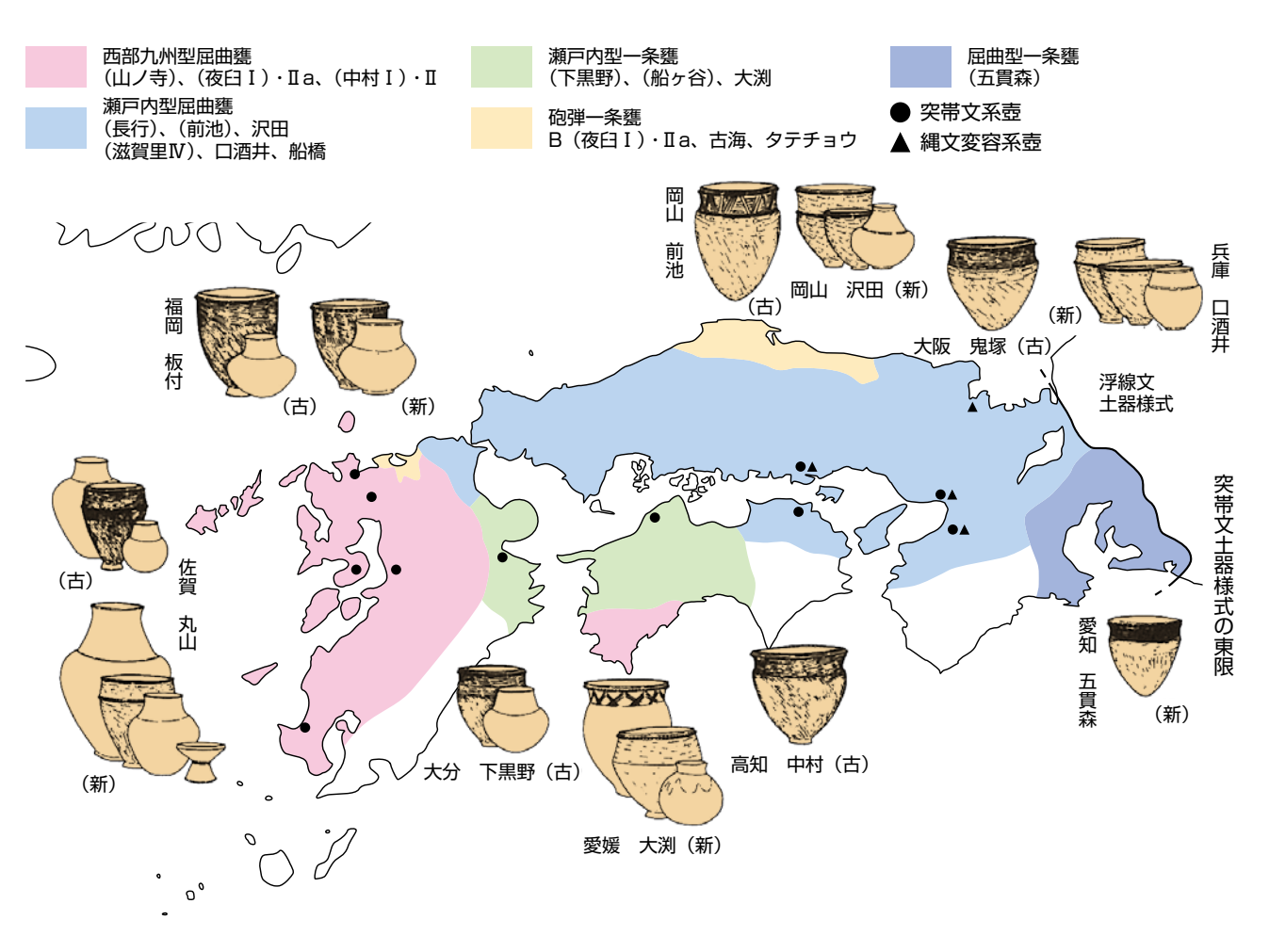
この土器を使用する人びとは縄文時代の人びとで、形質的に低顔・低身長、抜歯などの習俗をもっていた。つまり、縄文時代は形質と土器が関連づけられていたのである。

前10世紀後半に九州北部で灌漑式水田稲作が始まると、水田稲作民も150年ぐらいは、基本的に突帯文土器群に貯蔵用の壺形土器を加えた土器群を使っていた（❶）。種籾貯蔵用の壺の比率は、その当初から３割を超えるなど、きわめて高いことが特徴である。

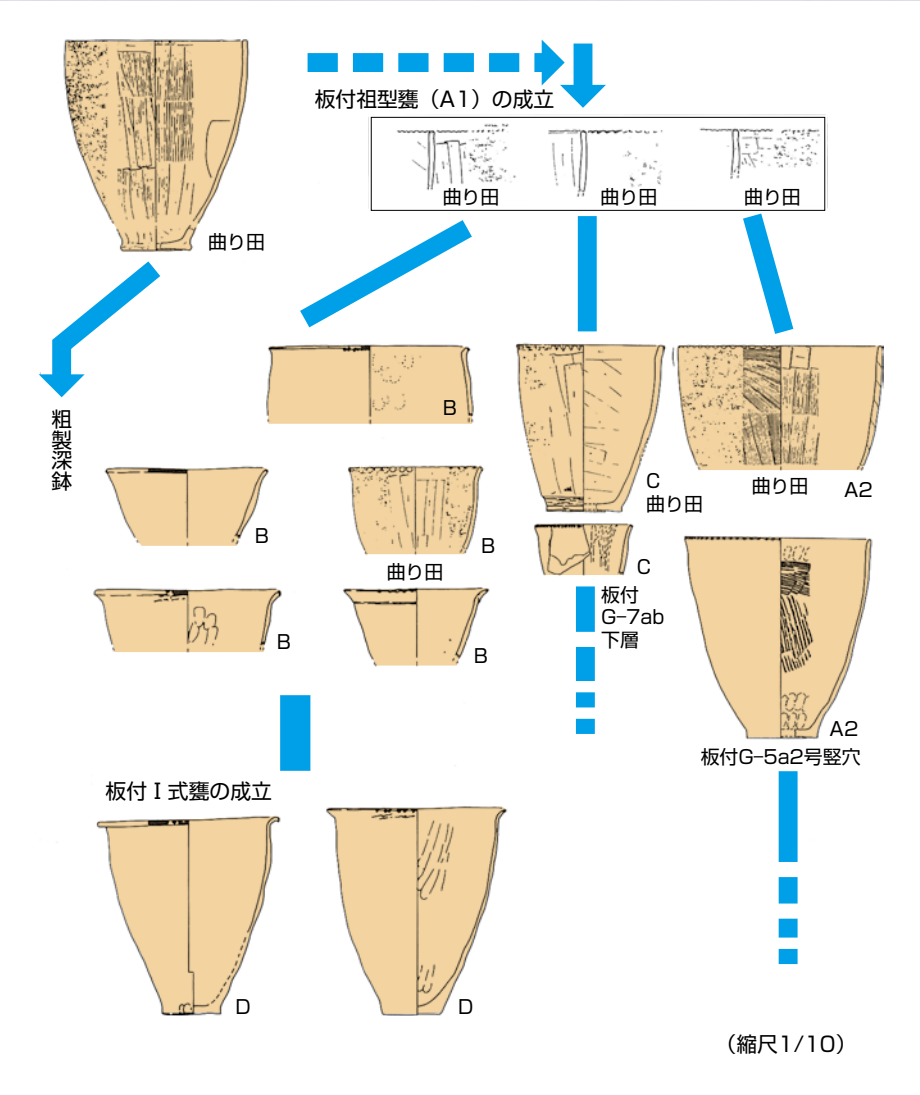
前８世紀のはじめに、福岡平野で新しい土器が創造された（❷）。板付（いたづけ）Ⅰ式土器（D）である。韓半島青銅器前期文化の祖型甕（A１）が弥生的変容を遂げたものだ。同時期の韓半島の松菊里（ソンゲンニ）式甕とは似て非なる弥生稲作民の土器である。

板付Ⅰ式土器は、甕、壺、鉢、高坏から構成されるが、特に調理用の甕に突帯文甕と機能上の違いがあった可能性がある。調理の際、蓋の使い方が異なるからである。

❶突帯文土器様式圏内における主要な煮炊き用土器と器種構成



❷板付Ⅰ式甕の成立過程



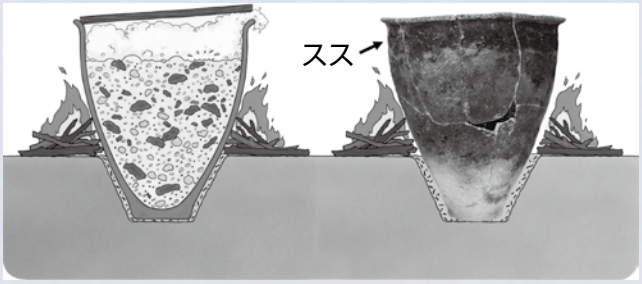
突帯文甕の場合、調理の時に用いる蓋は、お釜の蓋のように、蓋の外周が土器の口より外側にはみ出すので、外蓋と呼べるのに対し、板付Ⅰ式甕の場合は、甕の口縁部が外側に反っているため、蓋を載せると土器のなかに若干落ち込む。まるで落し蓋のように（❸）。

蓋の使い方の違いは、調理する素材の違いと関係しているのでは？と考えたこともある。

ところが、突帯文甕と板付Ⅰ式甕が共伴するのは、玄界灘沿岸地域だけで、それ以外の地域では、どちらかの土器がほぼ100％を占めていた。

たとえば、九州東北部の響灘沿岸、瀬戸内、四国、近畿は板付Ⅰ式甕の系統を引く遠賀川系甕がほぼ100％を占める。一方、九州の有明海沿岸や熊本、鹿児島では突帯文の流れを引く突帯文系甕がほぼ100％を占める。

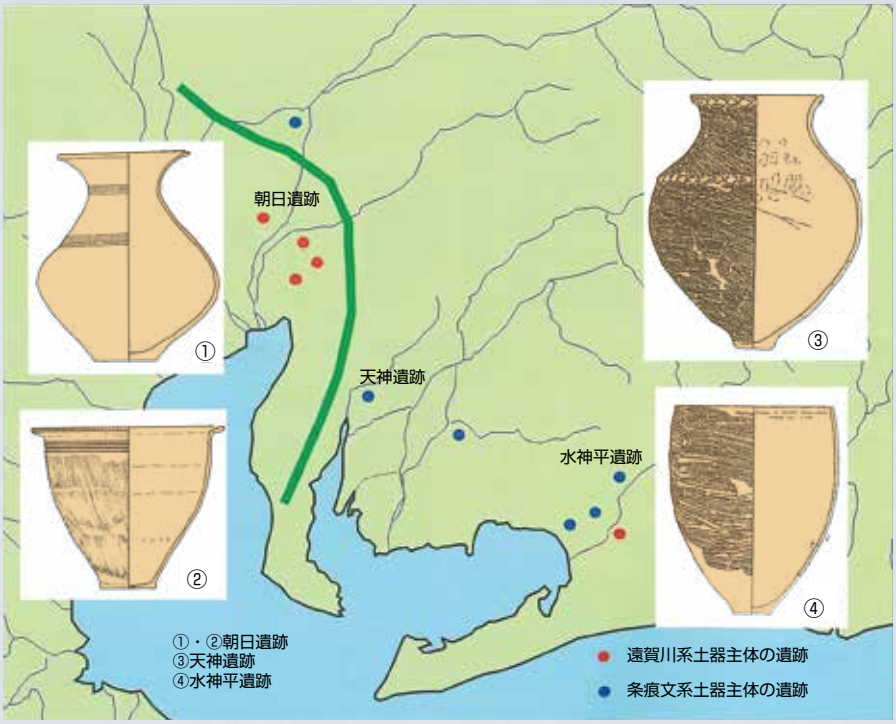
❸板付Ⅰ式甕の使用方法



ただ唯一の例外は、伊勢湾沿岸地域である。この地域では1950年代より遠賀川系と突帯文系の条痕文土器、そして、両者の特徴を合わせ持つ類遠賀川系土器という三系統の土器が存在し、使用する人びとの生業の違いが指摘されていた（❹）。

いずれにしてもこうした弥生前期の調理用土器の系統差が何を反映しているのか、あまりよく明らかでな

❹伊勢湾沿岸地域における弥生文化と縄文文化の対峙



東海地方では、水田稲作が始まった前６世紀後半ごろは、西日本の弥生文化（遠賀川系土器の文化）と地元の縄文系の文化（条痕文系土器の文化）で地域や立地を別にして生活していた。

かったのである。

しかし先ほど述べたように、伊勢湾沿岸地域においては、遠賀川系甕を使用する人と条痕文土器の甕を使用する人のDNAが異なっていた。

つまり、在来の採集・狩猟民は条痕文土器を、渡来系の水田稲作民は遠賀川系土器を使っていたことに加えて、DNAも異なっていた可能性である。

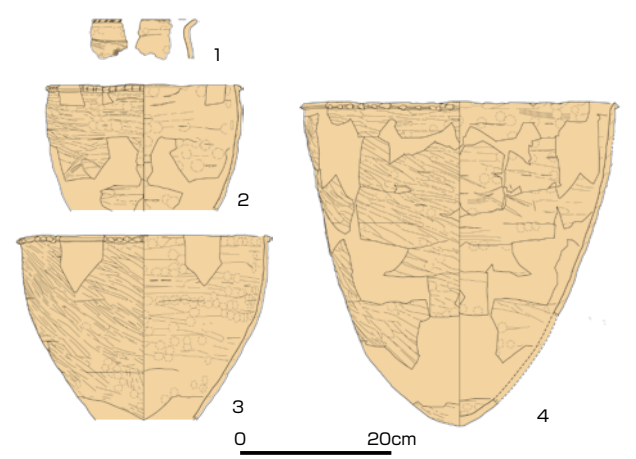
■ 鳥取ではどうか

鳥取平野で水田稲作が始まったころの遺跡である、鳥取市本高弓ノ木（もとだかゆみのき）遺跡の水田稲作民は、遠賀川系甕を使用していたが、その割合は少なく、在来系の古海（ふるみ）式という突帯文系の甕が９割以上を占めていた（❺）。砲弾型の口縁部に一条の突帯を貼り付ける甕で、晩期末以来、山陰側の山間部に展開する。岡山の晩期末の突帯文甕である沢田式に後出し、近畿の長原式と同じ弥生前期に属する。なお、古海遺跡の甕はほぼ100％が古海式で遠賀川系甕は持っていない。

筆者らは、本高弓ノ木遺跡で見つかった遠賀川系土器と古海式土器に着いていた炭化物の炭素14年代測定を行い、その年代を明らかにしたことがある。その時期は前７世紀前葉～後葉を中心とする時期であった。

つまり、伊勢湾沿岸地域の尾張と三河（渥美半島）にみられた生業とDNAを異にする集団の存在が、鳥取においてもみられるということである。山間部と平野部で、土器と生業を異にする人びとが暮らしていた可能性である。あとはDNAがどう関連するかである。

❺鳥取平野の弥生時代開始期の土器



１が遠賀川系土器、２～４が突帯文土器（古海式）

❻弥生時代開始期の年代と土器型式

時代	炭素14年代	較正年代	福岡平野	鳥取平野	尾張	三河
	(^{14}C BP)	cal BC				
弥生早期前半	2,700台	前10世紀後半	山ノ寺・夜臼Ⅰ	桂見Ⅱ	五貫森古	五貫森古
後半	2,600台	前９世紀後半	夜臼Ⅱａ	古市・河原田	五貫森新	五貫森新
弥生前期初頭	2,500台	前８世紀初め	夜臼Ⅱｂ・板付Ⅰ	古海	馬見塚	馬見塚
中頃～後半	2,500～ 2,400台	前７世紀～ 前５世紀	板付Ⅱａ・Ⅱｂ	沢田系・古海古、 古海新・Ⅰ古	樫王Ⅰ中	樫王
前期末	2,300台	前４世紀	板付Ⅱｃ	前期Ⅲ	水神平Ⅰ新	水神平

■ 弥生前期の西日本の多様な人びと

以上のように、弥生前期の鳥取にも、土器の系統差とDNAを異にする人びとがいた可能性が出てきた。これが考古学と人類学の新しいコラボである。現在、土器の系統差からみて西日本の弥生早・前期には３つの弥生時代人を想定できる。

A　弥生前期の水田稲作民。渡来系弥生人の形質とDNAをもち、板付・遠賀川系土器を使用する人びと。まだ前６世紀の愛知県朝日遺跡の人びとしか確認できていないが、板付Ⅰ式土器や遠賀川系土器を使用する水田稲作民は、ほぼこのタイプの可能性があると考えている。

B　弥生早期の採集・漁労民。在来系の形質とDNAをもち、突帯文土器を使用する。前８世紀の佐賀県大友遺跡の人で、韓半島系の支石墓に葬られていたことから、韓半島の青銅器文化を受け入れた、在来の採集・漁労民を祖先にもつ人びとである。いわゆる西北九州型弥生人に相当するが、まだ渡来系の人びとと混血はしていない。

C　弥生前期の採集・狩猟民でアワやキビを補助的に栽培する人びと。在来の縄文系の形質とDNAをもつ。条痕文土器を使用し、伊勢湾沿岸地域に前期後半まで存在した。渡来系弥生人と混血してはいない。

西日本には、これら以外にも佐賀県吉野ヶ里遺跡や本高弓ノ木遺跡の人びとのように、水田稲作を行い、突帯文系甕を使用する人びとが、有明海沿岸や鹿児島西部、鳥取に存在する。このような弥生前期に突帯文系甕を使い続ける人のDNAはまだわからない。

■ おわりに

西日本各地の水田稲作開始期には、DNAを異にする渡来系水田稲作民、在来系採集・狩猟民と、未確認だが在来系水田稲作民も加えた多様な人びとが存在して、その後の倭人形成をスタートさせた。

考古学と分子人類学との初コラボレーションが、弥生時代の真実を解き明かしていくことになるであろう。

青谷上寺地遺跡出土人骨の概要

散乱する人骨の発見

西暦2000年、青谷上寺地遺跡第１次調査でSD38-２と名付けられた弥生時代後期の溝状遺構から散乱する大量の人骨が発見された（❶）。総数は5,323点。取り上げ後、鳥取大学医学部に運ばれた人骨は、井上貴央教授（当時）により詳細な観察が行われた。その成果は、この人骨群を理解するための基礎情報としてとても重要である。

❶SD38-２に散乱する人骨

個体数

SD38-２には一体何人分の骨が埋まっていたか。大腿骨の検討から試算された個体数は106体、その他に新生児の大腿骨が３体分確認されているので、少なくとも109体（106＋３）の人骨が埋没していたことになる。

性別

人骨には男女の違いが表れやすい部位がある。その１つ、寛骨（腰の骨）には男性骨35個体、女性骨17個体が確認されている。また、頭蓋骨には男性骨が17個体、女性骨が15個体ある。109個体の内訳は分からないが、男女比はほぼ同じか、男性の方が若干多いと考えられる。

年齢

寛骨や頭蓋骨には加齢も表れる。寛骨に観察される男性骨には30～40歳（壮年期）、女性骨には15～20歳（青年期）が多いと推定されている。また、男性の頭蓋骨は壮年以上が９割近くを占め、その半数が壮年後半もしくは熟年（中年期）と推定されている。一方、女性の頭蓋骨には壮年後半と推定される個体は少ない。よって、寛骨、頭蓋骨共に年齢の傾向も男高女低である。なお、新生児の骨は見つかっているが、その他に10歳未満の子どもであることが確かな骨は確認できない。

身長と顔つき

性別が分かる上腕骨や大腿骨をもとに計測された推定平均身長は、男性が約162cm、女性が約148cmである。また、SD38-２出土人骨の頭蓋骨は、福岡県金隈遺跡や山口県土井ヶ浜遺跡から出土した渡来系弥生人骨や韓国金海市礼安里古墳出土の人骨の頭蓋骨と類似性が高く、縄文人骨とは類似性が低い。

病歴

結核を患い、背骨が丸まって癒着した脊椎カリエスという症例が観察される人骨が見つかっている（❷）。骨折が治癒した骨もあった。今ほど医学が進歩していない時代、倭人たちは切実な思いで病気や怪我と向き合っていたに違いない。

❷結核が進行した人の背骨

参考文献

井上貴央・松本充香 2002「青谷上寺地遺跡から検出された人骨」『青谷上寺地遺跡４』第２分冊 鳥取県教育文化財団
井上貴央 2006『青谷上寺地遺跡の弥生人と動物』鳥取県教育委員会
井上貴央 2009『青谷の骨の物語』今井書店
鳥取県教育文化財団編 2002『青谷上寺地遺跡４』

青谷上寺地遺跡出土人骨から何が見えてきたのか

Shinoda Ken'ichi　Kanzawa Hideaki　Sakaue Kazuhiro
国立科学博物館　篠田 謙一・神澤 秀明・坂上 和弘

篠田 謙一　プロフィール
1955年、静岡県生まれ。国立科学博物館館長。専門は分子人類学。ヤポネシアゲノム研究計画A02（古代人ゲノム）班研究代表者。著書に『新版 日本人になった祖先たち』（2019年 NHKブックス）などがある。

■ はじめに

自然人類学は、人間の生物学的な側面を研究する学問で、その中心的な課題は人類の起源と進化の解明になる。日本の場合は、日本人の起源と成立の経緯を明らかにすることが重要なテーマとなっている。明治以来、日本の人類学者は列島の各地から出土する人骨の形を比べることで、この問題の解明に取り組んできた。しかしながら、骨の形は成長期の栄養状態などにも影響を受けるので、遺伝による変化を読み取ることは難しく、血縁関係や集団同士の関係についての結論には限界があった。

しかしこの状況は、1980年代からヒトのDNAを読み取ることができるようになったことで大きく変わることになった。DNAは親から子どもに伝わる遺伝物質の本体なので、その解読が進めば系統や血縁をこれまでにない精度で明らかにすることができる。特に2010年以降は、新たなDNAの解析方法が開発されたことで、それまではミトコンドリアのDNAしか解析できなかった古人骨でも、膨大な情報を持つ核のDNA（核ゲノム）の解析が可能になっている。この技術革新によって人類の起源や日本人の成り立ちについての研究は新たな段階を迎えることになった。

青谷上寺地遺跡から大量の弥生時代人骨が発見されて20年以上が経過した。当初よりその形態だけではなくミトコンドリアDNAの解析も行われていたが、上述したようにこの10年間で分析方法は大きく変わり、得られる情報も飛躍的に進歩した。そこで国立科学博物館人類研究部は鳥取県の協力を得て、数年前からこれらの人骨の形態とDNA分析の再調査を行ってきた。その結果、従来では分からなかった彼らの遺伝的な性格や、死後の状況などが明らかになっている。本講演では、最先端の自然人類学の研究が、弥生時代を代表する遺跡である青谷上寺地遺跡から出土した人骨からどのような情報を引き出しているのかを説明する。

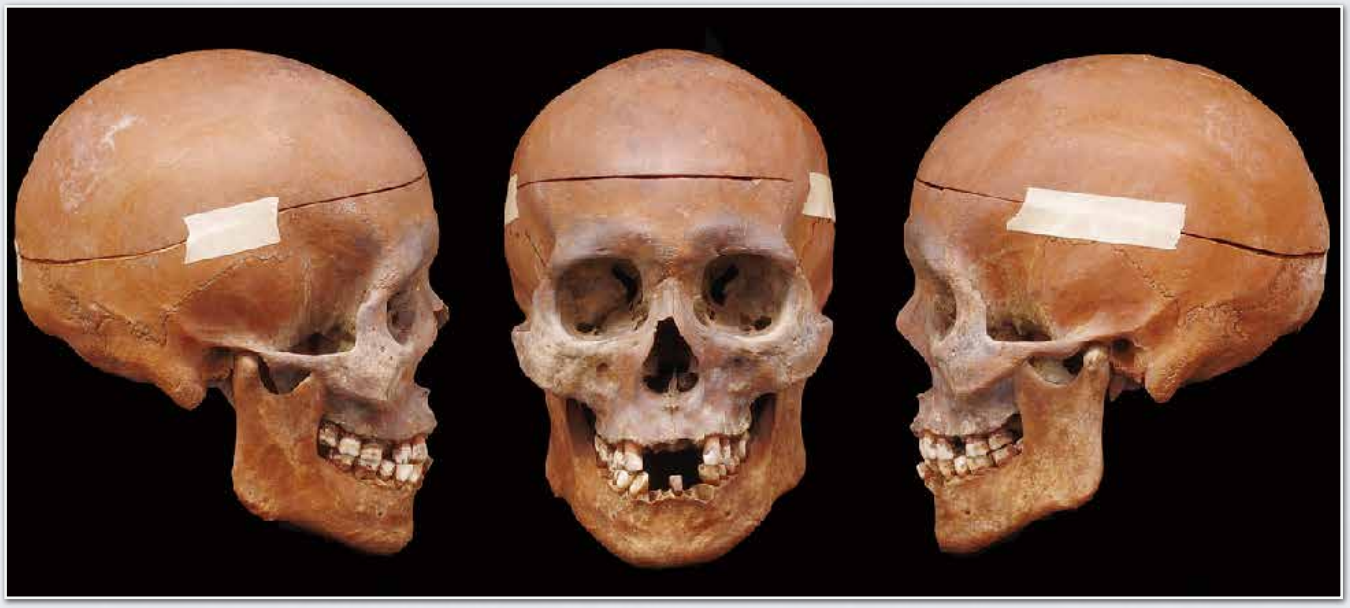
■ 形態の研究から新たに判明した事実

青谷上寺地遺跡からは、弥生時代後期のものとされる約5,300点の人骨がまとまって発見されている。これらの人骨はSD38-２と名付けられた遺構に集中していること、かなりの人骨に殺傷痕が認められること、低湿地に埋葬されていたために比較的残りがよく、中には脳の残っている個体がある事などから、発掘当初から大きな注目を集めた。また国内最古の発見例となる結核に罹患した人骨の発見など、古病理学的にも重要な発見があった。

SD38-２の人骨群は、ある程度は個体別になっていたものの、大部分は散乱状態で発見されているため個体の識別は完全にできているわけではないが、100体以上の人骨からなることが分かっている。頭骨の形状の研究から、これらの人骨は在来の縄文人の子孫ではなく、渡来系弥生人と呼ばれる北部九州に稲作をもたらした人々との類似性が指摘されている。

今回の再調査では、以前から指摘されていた頭頂部の焼成の痕跡が、さらに多くの個体で確認できること

❶青谷上寺地遺跡８号人骨



が判明した。観察した29個体の頭蓋のうち、確実に焼成が認められるのが13個体、焼成の可能性が高いものが14個体存在しており、焼成はほとんどの個体に及んでいたことになる。写真は８号人骨のもので、顔面部のみが灰白色化しており、焼成を受けた可能性があると判断されたものである（❶）。このような頭部の焼成の多くは、頭蓋全体を焼いたものではなく、部分的な焼成に留まっているところに特徴がある。しかも焼け方からみて、軟部組織が残存した状態で、比較的低い温度（600～800℃程度）で焼成されたものと考えられている。大腿骨や脛骨などにも部分的に焼成を受けた骨も散見されるが、それらは全体でも13例ほどしか見つかっておらず、頭部を選択的に焼いていた可能性が高い。また、焼成は頭頂部に最も多く（８個体）、これは頭部が離断された後に焼かれた可能性を示唆している。

青谷上寺地遺跡出土人骨には、当初より多数の創傷があることが指摘されている。今回の再調査では、頭部への損傷が新たに６例に認められた。このうち４例は鋭利な利器が頭蓋に刺さることで形成されたものだったが、残りの２例は薄く細い刃による引っ掻き傷であった。四肢骨には戦闘などによる損傷も認められるが、同時に解体痕も見つかっており、出土人骨は戦闘の被害者だけではなかった可能性がある。

なお、これまでに成人２例の結核症例が報告されているが、その他にも少なくとも成人１体、幼児２体が結核に罹患していたことも判明した。結核は伝染性が強く、同じ地域に居住していれば容易に拡散したと考えられる。このことは、人々が同一の地域に居住していた可能性を示唆する結果となっている。

■ DNA分析の結果分かった事実

SD38-２出土人骨のうち、頭骨及び下顎骨から36の臼歯ないしは側頭骨片を採取して分析した。サンプルの内訳は、頭骨から採取したものが24、下顎骨の臼歯が12本である。事前の簡易分析でサンプルのDNAのクオリティをチェックしたが、３つのサンプルには解析可能なDNAが残っていなかった。そこで残りの33サンプルから抽出したDNAを次世代シークエンサと呼ばれる機器を用いて解析し、ミトコンドリアDNAの全配列（16,569塩基分）と核のDNAを読み取った。その結果、頭骨と下顎骨でDNAが一致し、同一個体である事が判明したものが一組あった。従って、分析できた33サンプルは、32個体分の人骨から構成されていることになる。上述したように、青谷上寺地遺跡の出土人骨は少なくとも100体程度の人骨群であるとされているので、この実験では全体の３分の１程度の個体を分析したことになる。

異なる個体間で、ミトコンドリアDNAの配列が完

全に一致したものは２組だけだった。これらには母系での血縁関係があると判断される。従って32個体のうち、母系の血縁がある可能性のある個体は４体、全体の12.5パーセントということになり、残りの28体、約９割の人々の間には母系の血縁が認められなかった。ヒトの流入が少ない長く続いた村落では、同族の婚姻が増えることで、やがて構成するミトコンドリアDNAのタイプは少なくなるのが一般的である。青谷では、ほとんどの人々の間に母系の血縁がないことは、古代の一般的な村落のイメージとは異なる集団であったことが示唆される。

青谷上寺地遺跡では、SD38-２以外からも人骨が出土している。今回はその中から漂着人骨と呼ばれる２体とNo.33頭骨と名付けられた１体の人骨も分析の対象とした。これらはいずれも弥生時代中期のものとされており、SD38-２人骨に先行する時代のものである。互いのミトコンドリアDNAのタイプは異なっており、これらの間にも母系の血縁はなかった。

SD38-２から11体、漂着人骨１号とNo.33頭骨の合計13体について核ゲノムの解析を行った。各個体のDNA断片から、Ｘ染色体とＹ染色体由来の断片の比を求めて性別を判定した。その結果、10体が男性、女性は３体だった。ミトコンドリアDNAとY染色体DNAのタイプ（ハプログループ）には、在来の縄文人の持つものと弥生時代以降に日本列島にもたらされたものがある。今回分析した人骨では、母系に遺伝するミトコンドリアDNAの多くが渡来人に由来するものであるのに対し、父系に伝わるY染色体DNAには在来の縄文人に由来するものが多いことが判明した。このことは婚姻が在来系集団と渡来系集団の間でランダムに行われなかった可能性を示唆しているとも解釈できるが、混血が時代と共にどのように進んだのか等、情況が不明確なので現段階で結論を出すことは難しい。

■ 青谷の集団としての遺伝的な性格

核のDNAの分析は、形態学的な研究からは捉えることの難しい混血の程度までを明らかにすることができる。図は現代の日本人を含む東アジアの集団と、縄文人、青谷上寺地遺跡出土の13体および他の弥生人のSNP（ヒトゲノム中に存在する１塩基の違い）データを用いて、集団の関係を図式化したものである（❷）。膨大なSNP情報を可視化するために主成分分析という方法を用いている。この方法は二次元に情報を集約するためにかなりの情報をそぎ落としてしまうが、集団間の関係について大まかな傾向を知ることはできるので、この分野の研究によく用いられている。

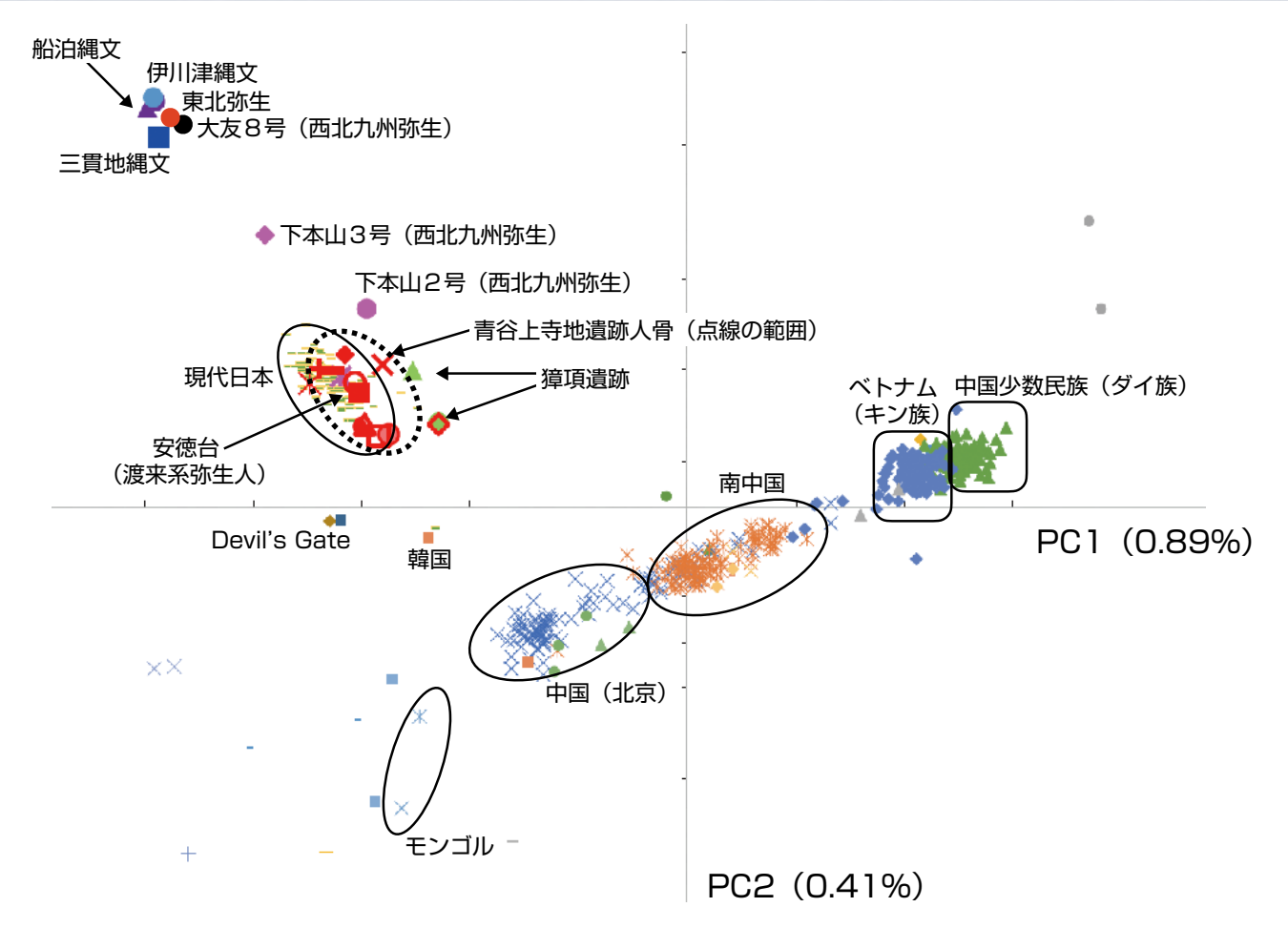
図の下から斜め右上の方向に向かって、ユーラシア大陸東部の集団が北から南に向かって並んでいる。これは東南アジアから東アジアの現代人集団が互いに関係を持ちながらも、ある程度遺伝的に分化している様子を示している。現代日本人はこの大陸集団から離れた部分に位置しており、北京の中国人と現代日本人の中間には韓国人が位置している。縄文人は現代のアジア集団とは大きく異なっているが、これは縄文人の祖先集団が他の集団と非常に古い時代、恐らく東アジアにホモ・サピエンスが進出して間もない時期に別れたためであるという説明がされている。

現代日本人が持つ遺伝的な特徴は、北東アジアの大陸集団と縄文集団の混合によって形成されたということが図から読み取れる。興味深いのは、韓国人の位置で、これは朝鮮半島集団の基層にも、縄文につながる人たちの遺伝子があることを意味している。このことは縄文人が韓国にまで分布していたと考えるよりは、初期拡散で大陸沿岸を北上したグループの遺伝子が朝鮮半島にも残っていたと考える方が理解しやすい。それを証明しているのが６千年前の韓国新石器時代の獐項（ヤンハン）遺跡の２体のゲノムで、いずれも現代の韓国人よりも縄文的な遺伝的要素を持っている。

弥生人に関しては、青谷人骨のほかに、東北と西北九州、安徳台（あんとくだい）の弥生人（渡来系）の位置を図に示している。東北の弥生人は完全に縄文的なゲノムを持つが、縄文人の直系の子孫と考えられてきた西北九州の弥生人では、かなり混血の進んでいるものもいたことが示されている。また、渡来系とされる弥生人もこの分析では現代日本人の範疇に入っている。これまでは渡来系弥生人を、現在の朝鮮半島集団と同一視するイメージがあったが、それを変える必要があることをこの分析結果は示している。

青谷上寺地の各個体は、現代日本人の範疇に入った

❷SNPデータを用いた主成分分析



が、狭い範囲に固まることはなく、現代日本人の中に広範に散在する形となった。いくつかの個体では、分析できたSNPの数が少ないので、そのためによるバイアスを見ている可能性はあるが、比較的ゲノムのカバレッジが高かった個体同士でも大きく離れており、青谷上寺地遺跡集団の遺伝的な構成がバラついていることは間違いない。これはミトコンドリアDNAの系統が数多く観察されたこととも一致しており、青谷は多くの人々が流入や離散を繰り返す古代都市であった可能性が高い。

彼らがこの遺跡に長期間居住した人々であったとすれば、互いがほとんど血縁関係を持たない人びとで、それがまとめて殺傷されたということになる。年代測定から、これらの人骨はいわゆる「倭国大乱」の時代に生きた人々であることも分かっている。このことと併せて考えると、青谷上寺地遺跡は、当時の混乱した社会状況を示す代表的な遺跡であると言って良いだろう。

青谷上寺地遺跡出土人骨の時代背景

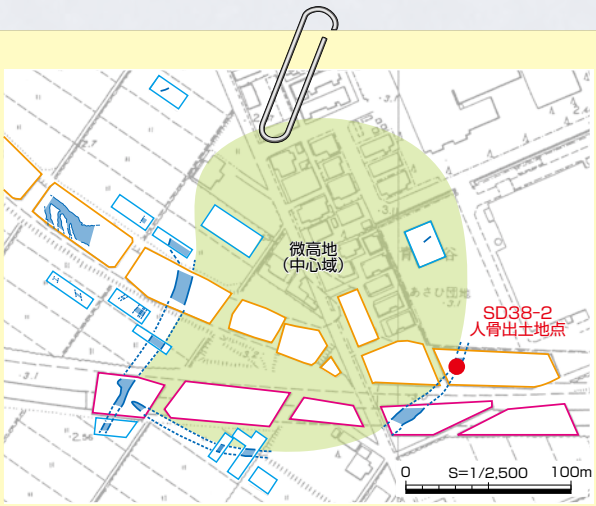
Hamada Tatsuhiko
濵田 竜彦

濵田 竜彦　プロフィール
1969年、山口県生まれ。鳥取県地域づくり推進部文化財局とっとり弥生の王国推進課 課長補佐。専門は日本考古学。ヤポネシアゲノム研究計画B01（考古学）班研究分担者。著書に『日本海を望む「倭の国邑」妻木晩田遺跡』（2016年 新泉社）などがある。

■ はじめに

青谷上寺地遺跡の県道８区で検出された弥生時代後期の溝状遺構「SD38-２」（❶）には、5,323点（推定109個体）に及ぶ人骨が埋もれていた（本誌15頁参照）。新学術領域研究ヤポネシアゲノムの考古学班では、この人骨群の年代学的調査に取り組み、頭蓋骨３個体の炭素14年代を較正した暦年代の範囲が弥生時代後期後半の年代となる紀元２世紀台に集中することを確認している（濵田他2020）。さらに古代人DNA班によるDNA分析では、頭蓋骨32個体のミトコンドリアDNA（Mt-DNA）に29もの系統があることや、核DNAの分析に成功した12個体の遺伝的変異が現代日本人の領域に広く分散することが分かり、多様性を有する集団の姿が浮かび上がってきた（篠田他2020、神澤他2021）。

❶溝状遺構SD38-２と人骨出土地点



青谷上寺地遺跡には、弥生時代に微高地だった約３haの範囲に遺構や遺物が密集するように分布している（通称・中心域）。この微高地の東側を区画する溝に多数の人骨が埋もれていた。人骨が埋没した頃は幅が９ｍほどの溝だったと考えられている。

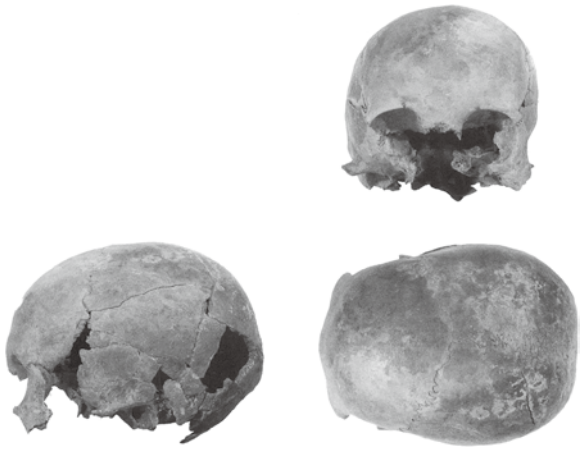
Mt-DNAは母から子へと受け継がれる。同一配列のMt-DNAを有す個体は母と子や、母を同じくする兄弟といった関係にある。SD38-２出土頭蓋骨32個体にはMt-DNAの配列が完全一致し、母系の血縁関係がうかがわれる個体は４個体しかなく、その他は血縁関係のない人々だったことが分かった。Mt-DNAの系統は、外部からの人の流入が少ない集団では単純、外部からたくさんの人が流入する都市部の集団では多様になる。SD38-２出土人骨群におけるMt-DNAの在り方は都市部の集団に類似する（篠田他2020）。核DNAの分析から見えてきた遺伝的多様性はこのことをさらに鮮明にした。こうした事実は、青谷上寺地遺跡を弥生時代の交易拠点だったと考察する考古学の所見を深め、弥生時代の人の動きや集団を考える上でとても重要である。

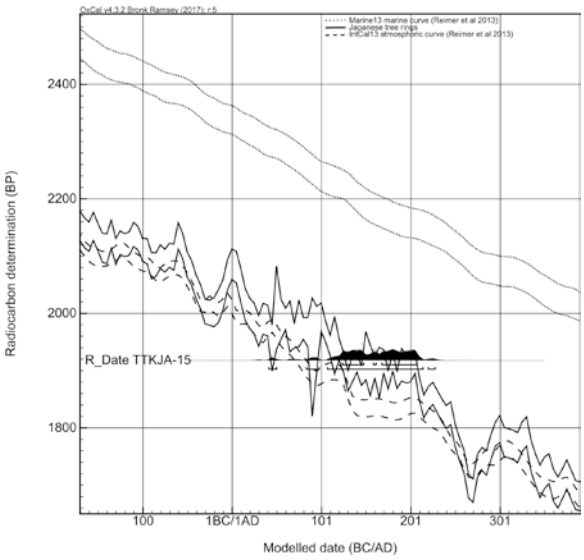
では、SD38-２出土人骨群は２世紀のいつ頃、どのくらいの期間を経て形成されたのか。このことを考古学的に検討し、SD38-２に埋もれていた人々が生きた時代を探りたい。

■ 時を探る ―炭素14年代法と土器編年―

大気中に漂う炭素には重さが異なる炭素12、13、14という種類があり、炭素12、13は安定しているが、炭

❷炭素14年代を測定した頭蓋骨と較正年代





素14は放射線を出しながら規則正しく壊れ、およそ5,730年で濃度が半分になる。動植物は呼吸や食事を通じて常に炭素を体に取り入れているので、生存中の体内には大気中と同じ濃度の炭素14が存在するが、死後は新たな炭素が取り込まれないので、しだいに炭素14の濃度が減少していく。こうした性質を利用し、遺跡から出土した動植物遺体や土器付着炭化物の炭素14濃度を測定して、年代を割り出すのが、炭素14年代法である。

しかし、この方法で測定された「炭素14年代」は、資料に残存する炭素14の濃度であって、暦年代ではない。しかも、炭素14年代は「大気中の炭素14濃度は常に一定である」と仮定して計算されるが、実際、大気中に生成される炭素14の量は変動している。そこで、確実な年代が判明している樹木年輪の炭素14濃度を一つ一つ測定し、暦年代を知りたい資料の炭素14濃度と比較する作業（較正）を経て、暦年代を求めるのだが、較正された暦年代は、ある程度の幅を持って示されるので、資料の「真の年代」は“その範囲のどこか”にあることを意味している。SD38-２出土人骨群の場合、ほぼ２世紀の全域に暦年代の範囲が広がる（❷）。年代を測定した３個体の真なる死亡年代は“どこ”にあるのだろうか。

一方、弥生時代に関する考古学の研究では、土器の形や文様（様式）が時を経て変化していくことに着目して、土器の様式編年という物差しを構築し、遺跡や遺構の年代を検討している。現在、鳥取地域の弥生土器の様式編年案では、弥生時代後期の土器様式をおおよそ25年単位で細別する方向である。つまり、人骨群に伴う土器の様式が分かれば、炭素14年代を較正した暦年代の範囲の中にある「真の年代」を25年程度の時間幅の中に絞り込める。

■ 大量の散乱人骨

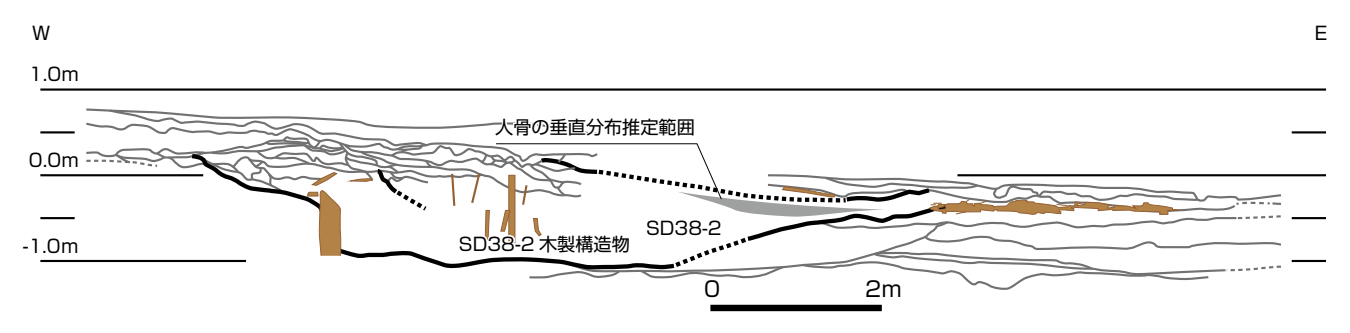
SD38-２は弥生時代の人々が活動の拠点としていた微高地の裾部をめぐる溝状の遺構である。発掘調査時の記録を見直すと、微高地（西）側から埋まり、浅くなったところに大量の人骨が埋もれていたことが分かる（❸）。

発見時、この人骨群は大量の人骨がばらばらに散乱していたことで様々な憶測を呼んだ。では、どうして人骨は散乱したのか。

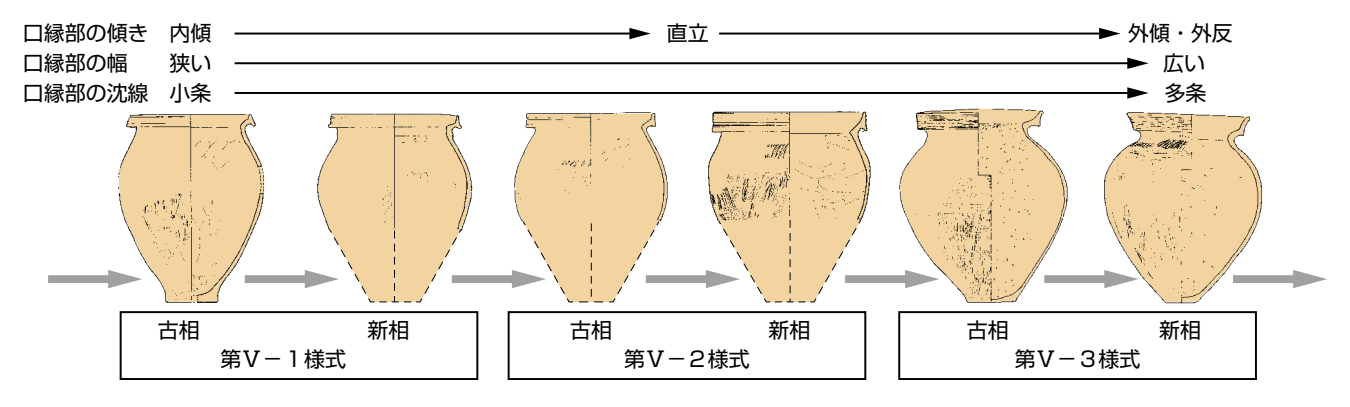
他の場所にあった人骨が大雨に起因する氾濫で洗い出され、流されてきたものならば、人骨が散乱する状況を理解しやすい。ところが、SD38-２を埋める土には水の影響が観察されていない（井上他2002）。調査地近辺に人骨の流出元も確認できないので、他所から移動してきたものとは考えにくい。

埋没が進んだSD38-２の上部に大量の死体が放置さ

❸SD38-2の土層断面図と人骨の垂直分布



❹弥生時代後期（第Ⅴ様式）の甕の変遷



れ、白骨化する過程で散乱した可能性もある。地表に露出した死体は近隣に生息する肉食哺乳類の格好の餌となる。すると食い荒らされた死体の骨は散乱し、個体のまとまりを失うからだ。しかし、動物に荒らされた骨には噛み痕が残るが、SD38-２出土人骨には動物の噛み痕が観察されていない（井上他2002）。この人骨群は地表に放置されていた死体が散らばったものではなさそうである。

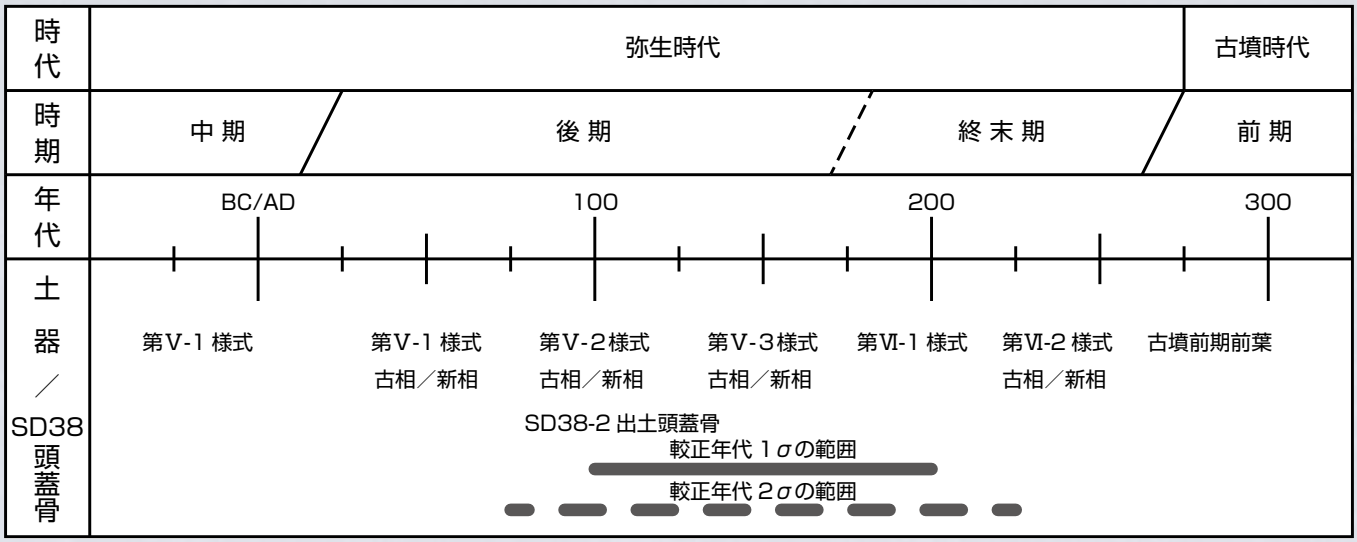
そこで散乱した要因について、埋められた死体が白骨化する過程か、白骨化した後に撹乱を受けたという仮説が立てられている（井上他2002）。以前は私もこの仮説を支持していたが、改めて発掘当時の記録を整理してみたところ、人骨を包含する地層は整然とレンズ状に堆積しており、散々掘り返されて、同一個体の骨が広範囲に散らばるほど掻き乱されているようにみえないことが分かった。むしろ、SD38-２出土人骨群は著しい撹乱を受けておらず、もともと個体のまとまりを失った状態でSD38-２に埋まったのではないか。この見立てが妥当ならば、SD38-２に埋まっている土器も埋没時の位置を保っていることになり、人骨群の形成時期や期間を決める有効な資料となりえる。

■ 人骨群の形成時期

弥生時代後期の鳥取地域では受口状の口縁部を特徴とする甕形や壺形の土器が製作されていた。私たちは、それらを第Ⅴ様式土器と呼び、弥生時代前・中期の土器と区別し、都合６つの小様式に細別している（❹ 濵田2009）。そして、弥生時代後期の暦年代については、始まりを紀元１世紀第２四半期とし、終わりを紀元２世紀第３四半期頃とみる考え方が示されている（森岡・西村2006）。各小様式の時間幅に大きな差がないと仮定して、この年代観に６つの小様式を当てはめると、第Ⅴ-１様式古相≒１世紀第２四半期、同新相≒１世紀第３四半期、第Ⅴ-２様式古相≒１世紀第４四半期、同新相≒２世紀第１四半期、第Ⅴ-３様式古相≒２世紀第２四半期、同新相≒２世紀第３四半期となる（❺）。

では、SD38-２の人骨群を包含する地層からは、どのような土器が出土しているのか。発掘調査報告書に掲載された土器の出土地点を調べ直した結果、SD38-

❺弥生時代後期（第Ⅴ様式）の土器の年代観



２の埋土と人骨群を包含する地層からは、いずれも第Ⅴ-３様式新相の特徴を備えた土器（❻）が出土していることが分かったので、人骨群の形成時期は第Ⅴ-３様式新相≒２世紀第３四半期に絞り込める。炭素14年代を較正した暦年代が２世紀に集中することが判明した人骨の真の年代は２世紀の第３四半期のどこかにあると考えられよう。

■ 人骨群の歴史的評価

もし人骨群が土器２小様式（約50年）以上の時間を経て形成されたものならば、人骨群には生存時期の重ならない人々が累積していることを想定すべきである。一方、土器１小様式（約25年）またはさらに短い期間に形成されたものならば、人骨群には生存期間が重なる人々の骨が多く存在することになる。

報告書に掲載されている土器の出土地点を点検した限り、人骨群に関係するのは全て第Ⅴ-３様式新相の土器であった。人骨群の形成期間は長く見積もっても第Ⅴ-３様式新相の土器が製作、使用されたとみられる25年を大きく超えないだろう。この人骨群には生存期間が重なる人々の骨が多く含まれると推測されるが、そのほとんどが血縁関係にないという事実は、紀元２世紀第３四半期の青谷上寺地遺跡には様々な地域に由来する人々が頻繁に流入していたことを示唆している。

なお、青谷上寺地遺跡に最もたくさんの遺構や遺物が確認できるのは、第Ⅴ-３様式新相の土器が製作、使用されていた頃である。建物跡が見つかっていないので、集落の規模を復元することはできないが、２世紀第３四半期は青谷上寺地遺跡史上最も賑やかな時代をむかえていたことになる。この頃、青谷上寺地遺跡では、花弁高杯（❼）に象徴される、他に類を見ない秀逸な木製容器が生産されていた。こうした極上の木製容器は、その当時、貴重な交易品として流通していたようだ。そして、紀元１～３世紀の青谷上寺地遺跡には、日本列島においては九州地方北部、中国地方の山陽側や四国地方、近畿地方、北陸地方、さらに海外においては中国や朝鮮半島を故地とする様々な物資が運ばれてきている（❽）。こうした地域から頻繁に、たくさんの人が訪れ、青谷上寺地遺跡に集い、暮らし

❻SD38-２などから出土した弥生土器

❼花弁高杯

❽１世紀に中国で鋳造された貨幣（貨泉）

ていたことを、都市的な遺伝的多様性は物語っている。

■ 激動の時代を生きた人々

中国で３世紀に編纂された『魏志』倭人伝には「その国、本また男子を以て王となし、住まること七・八十年。倭国乱れ、相攻伐すること暦年、乃ち共に一女子を立てて王となす。名付けて卑弥呼という」とある。３世紀前半に活躍した女王が擁立される以前、弥生時代の人々は激動の時代を経験していたようだ。また、５世紀に編纂された『後漢書』倭伝には「桓（後漢第11代桓帝、在位147-167年）・霊（同12代霊帝、在位168～188年）の間、倭国大いに乱れ、更々相攻伐し、暦年主なし。一女子あり、名を卑弥呼という」とあり、倭人たちが「相攻伐」していた年代が２世紀第３四半期だったことを記している。

つまり、青谷上寺地遺跡のSD38-２出土人骨群には、激動の時代を生きた人々が含まれていると推測される。その中には金属製の刀剣や銅製の鏃による負傷を確認できるものがあり（本誌４頁❷❸）、当時、青谷上寺地遺跡においても何らかの争いがあった様子がうかがわれる。

しかし、SD38-２に埋もれていた人骨の全てを争いの犠牲者とみなすのは早計である。結核などの病気の痕跡をとどめる人骨もあるし、受傷した人骨も全推定個体数の１割弱に過ぎないからだ。交易の拠点には様々な人が集う。時には交易に関わる利害関係のこじれなどがいさかいの火種となり、武器で人を殺める暴力行為が発生することもあったのではなかろうか。

この他にも『魏志』倭人伝には人を死に至らしめる記述がある。倭国の人々が中国へ渡航する際には「持衰」と呼ばれる役割を与えられた人がいて、「もし行く者吉善なれば、共にその生口・財物を顧し、もし疾病あり、暴害に遭えば、便ちこれを殺さんと欲す」というものである。「持衰」は道中の災厄を遠ざける役割を期待され、何事もなければ褒美を得るが、禍あれば殺されることもあった。また「その法を犯すや、（中略）、その門戸および宗族を滅す」という一文があり、大罪人の一族は皆殺しにされることもあったらしいことがうかがわれる。SD38-２出土人骨群には、こうした習俗に関連して死に至り、遺棄された人が含まれているかもしれない。

■ 弥生時代後期の鳥取地域と青谷上寺地遺跡

鳥取県では弥生時代後期になると丘陵部に有力者の存在を表す墳丘墓が顕在化し、１～２km四方に居住域が展開する大規模集落が現れる。その一つが妻木晩田遺跡である（❾）。妻木晩田遺跡では仙谷墳丘墓群（紀元２世紀第１～４四半期）の造営がはじまる頃、集落規模が著しく拡大し、３～５棟の竪穴建物跡を一群とする居住の単位が20以上も展開する大集落となる（濵田2016）。その最盛期は第Ⅴ-３様式新相≒２世紀第３四半期である。

また、妻木晩田遺跡からは中国の後漢で鋳造された

❾妻木晩田遺跡（２世紀の集落景観。このような居住の単位が20以上も存在していた）

鏡、朝鮮半島や九州地方北部で製作された鉄斧、中国地方の山陽側や近畿地方北部との関係を示す土器などが出土している。大規模集落を統べる有力者は、希少な物資の流通に関わる遠隔地の集団とつながり、威信財や優れた利器を獲得していた。青谷上寺地遺跡出土人骨には、鳥取県内に点在する勢力と遠隔地の勢力の間を行き来し、仲介する役割を担っていた人々が含まれているのかもしれない。

今後、SD38-２に埋もれていた人骨の年齢や性別の構成、人骨に刻まれた受傷痕や病歴、散乱する人骨群の形成要因などの再検討を通じて、弥生時代の交易拠点に集い、暮らした倭人の真実に接近を試みたい。

主要参考文献

石原道博編訳 1985『新訂 魏志倭人伝他 三編 －中国正史日本伝（１）―』岩波書店

井上貴央・松本充香 2002「青谷上寺地遺跡から検出された人骨」『青谷上寺地遺跡４』第２分冊 鳥取県教育文化財団

神澤秀明・角田恒雄・安達登・篠田謙一 2021「鳥取県鳥取市青谷上寺地遺跡出土弥生後期人骨の核DNA分析」『国立歴史民俗博物館研究報告』第228集

篠田謙一・神澤秀明・角田恒雄・安達登 2020「鳥取県鳥取市青谷上寺地遺出土弥生時代後期人骨のDNA分析」『国立歴史民俗博物館研究報告』第219集

鳥取県教育文化財団編 2002『青谷上寺地遺跡４』

濵田竜彦 2009「山陰地方の弥生集落像」『国立歴史民俗博物館研究報告』第149集

濵田竜彦 2016『日本海を望む「倭の国邑」妻木晩田遺跡』新泉社

濵田竜彦・坂本稔・瀧上舞 2020 鳥取県鳥取市青谷上寺地遺跡出土弥生時代中・後期人骨の年代学的調査」『国立歴史民俗博物館研究報告』第219集

森岡秀人・西村歩 2006「古式土師器と古墳の出現をめぐる諸問題―最新年代学を基礎として―」『古式土師器の年代学』財団法人大阪府文化財センター

文中の『魏志』倭人伝、『後漢書』倭伝の書き下し文は石原編訳（1985）を参考にした。

COLUMN

倭人の顔面装飾“黥面”

Okano Masanori
鳥取県地域づくり推進部文化財局
鳥取弥生の王国推進課 青谷上寺地遺跡整備室 文化財主事兼係長
岡野 雅則

倭人の身体装飾の一つに“イレズミ”がある。世界的な視点では、アルプスの氷河から発見された約5,300年前のミイラ（アイスマン）や古代エジプトのミイラの身体にも確認され、古代中国の文献にもその存在が記載されるなど、イレズミは古くから各地に存在した習俗だった。弥生時代の青谷上寺地遺跡に暮らした倭人もイレズミを施していたのだろうか。

歴史資料として、弥生時代に倭人たちがイレズミを施していた根拠が二つある。

一つは、いわゆる「魏志倭人伝」の記載で、抜粋すると次のようになる。「男子無大小皆黥面文身」男は皆、顔と体に大小のイレズミをしている。顔のイレズミを“黥面（げいめん）”、体のイレズミを“文身（ぶんしん）”と表現したようだ。「今倭水人好沈没捕魚蛤」今、倭の漁民は好んで水中に潜り魚貝を捕えている。「文身亦以厭大魚水禽後稍以為飾」イレズミは大魚や水鳥を避ける呪術（まじない）だったが、後には少々身の飾りにもしている。「諸國文身各異或左或右或大或小尊卑有差」諸国のイレズミはおのおの異なる。あるいは左、あるいは右、あるいは大きく、あるいは小さいが、身分の差を表す（文献１）。

もう一つは、人面を表現した弥生時代の土器や土製品である。現在の岡山・香川県や愛知県辺りを中心に全国で三十例以上の“黥面”が見つかっている。その多くには、顔面の左右両側、額の側面から目を通り頬下にかけて多数の弧線が描かれている。縄文時代の土偶にも目や頬を強調する線刻が描かれた例があり、日本列島でも古くからイレズミ習俗が存在したようだ（文献２）。

ただ残念なことに、山陰地方ではこれら黥面を想起させる土器や土製品は、今のところ見つかっていない。イレズミ習俗がなかったから又はイレズミはあったが人の顔を描く文化がなかったから見つからないのか、それともたまたま見つかっていないだけなのか。今後の発見に期待するしかないが、広い地域と交流し多方面に出自をもつ青谷の人々がイレズミの存在を知らなかったはずはない。

いつの日か、青谷上寺地遺跡の発掘現場で“黥面”の線刻絵画を掘り出し、このたびDNA分析の情報を駆使して復顔された男性の顔に躊躇なく描き加えたいものである。

黥面表現とみられる土製品
（岡山県津寺遺跡出土／弥生時代後期）

写真提供：岡山市教育委員会

参考文献

1　現代語訳は水野祐のものを参考とした。武光誠・読売新聞調査研究本部 1998『魏志倭人伝と邪馬台国』読売ブックレット No.10 読売新聞社
2　設楽博己2021「黥面考　顔のイレズミの歴史」『顔の考古学―異形の精神史―』吉川弘文館

COLUMN

コロナ時代の顔、弥生時代の顔

Kita Hiroaki
鳥取県地域づくり推進部文化財局
とっとり弥生の王国推進課 青谷上寺地遺跡整備室 文化財主事
北 浩明

コロナ禍とともに始まったマスク生活も、気が付けばもう一年半になる。マスクの物理的な煩わしさにはずいぶん慣れたけれど、マスク越しの会話にはいまだに慣れることができない。小さなマスクが対面した相手と私の間に大きな壁をつくっている気がして、なんだか落ち着かないのだ。この感覚はどこから来るのだろうか。

哲学者和辻哲郎の有名な随筆にこんな一節がある。「友人のことが意識に上る場合にも、その名とともに顔が出てくる。もちろん顔のほかにも肩つきであるとか後ろ姿であるとかあるいは歩きぶりとかというようなものが人の記憶と結びついてはいる。しかし我々はこれらの一切を排除してもなお人を思い浮かべ得るが、ただ顔だけは取りのけることができない。（中略）顔面は人の存在にとって核心的な意義を持つものである。それは単に肉体の一部分であるのではなく、肉体を己れに従える主体的なるものの座、すなわち人格の座にほかならない。」（「面とペルソナ」）

つまり、私たちは顔をその人の人格そのものとして、その人の存在そのものとして知覚している。誰かと向かい合ったとき、私たちは顔を通じてお互いの存在を確認し合っている。マスクで顔が半分隠されていると、存在が半分隠されているように感じる。これが、マスクを壁のように感じる理由ではないか。顔は他者へと通じる扉なのだ。

顔を思い描くことができなければ、その人の存在はあいまいにしか感じられない。それは過去の人々についても同じだろう。考古学の研究成果に、顔を持った個人が登場することはまずない。顔を持たず、実在感のない人々の歴史を想像するのはとても難しい。このことが、弥生時代や古墳時代の人気がぱっとしない理由の一つかもしれない。反対に戦国時代や幕末にファンが多いのは、一番には動乱期のドラマチックさによるものだと思うけれど、肖像画や写真に残された戦国武将や志士たちの顔の存在も、その人気に一役買っているに違いない。

近年まで、先史時代人の顔を細部まで知ることは、よほどの発見がない限りは不可能だった。ところが、骨から顔を復元する復顔法と遺伝情報の解析技術の発達によって、先史人の顔をリアルに再現できるようになった。この度お披露目された青谷の弥生人男性の復顔像も、この最新技術によって復元されたものだ。その顔は生きた人間かと見まがうほど精緻で、しっかりと個性もある。誰かの顔、と感じるのに十分な実在感だ。この顔の人物が二千年前の青谷の地に確かに居たのだ、と想像するのはそれほど難しくないだろう。

彼には顔が与えられたが、人格はない。今後研究が進めば、彼の生きた時代の手掛かりが今まで以上に得られるだろう。しかし、何より、彼に物語を与え、人格を与えるのは、私たちの想像力だ。彼は弥生時代にどんな世界を見て、何を思いながら生きていたのか。その物語に思いを巡らすとき、彼の顔は弥生時代への扉になってくれるだろう。

甦る倭人の素顔　青谷上寺地遺跡に

まるで生きているかのようなリアルな顔。これは、青谷上寺地遺跡第８頭蓋をもとに復元した、倭人の顔の模型である。

骨の主は熟年男性。彼の顔を科学的な「復顔法」で再現した。復顔法とは解剖学や人類学の研究成果を応用し、骨の特徴から生前の顔を復元する技術である。科学的な知識と観察力、芸術的なセンスとテクニックを兼ね備えた専門家が腕を振るい、彼の素顔を甦らせた。

頭に生えている黒々とした太い髪の毛は、DNA分析の成果を基に復元したものだ。

2000年の時を経て甦った青谷の倭人。彼は今にも口を開き、倭人の真実を語り始めそうではないか。

復顔のもとになった第８頭蓋

復顔の条件

坂上 和弘（国立科学博物館）

青谷上寺地遺跡から出土した弥生時代人骨の復顔を行うにあたり、どの人物（頭蓋）を基にするのかが問題となった。

復顔に絶対必要となる条件は、頭蓋の保存状態が良く、顔面部分の骨が出来る限り残っていることである。青谷上寺地遺跡出土人骨の中で、この条件を満たす頭蓋は、第３頭蓋（男）、第５頭蓋（男）、第６頭蓋（男）、第７頭蓋（男）、第８頭蓋（男）、第10頭蓋（男）、第32頭蓋（女）の７個体に絞られる。ちなみに、ここまで復顔の候補者がある遺跡は、江戸時代の遺跡以外では珍しい。青谷上寺地遺跡出土人骨の保存状態がいかに素晴らしいのかが良くわかる。

遺跡から出土した人骨を基に復顔を行う場合、複数の候補の中から、その遺跡で最も平均的な顔、またはその遺跡の特徴が最も現れている顔を基準とするのが望ましい。ところが、復顔候補７個体の顔面形態は多様であった。例えば、顔の輪郭だけとって見ても、「面長な」第３、第５、第７頭蓋、「幅広な」第６頭蓋、「中顔な」第８、第10、第32頭蓋、とバラエティーに富んでいる。したがって、顔の形だけでは青谷上寺地遺跡の代表的な顔と言える頭蓋を絞り切れない。

そこで、青谷上寺地遺跡出土人骨の主な特徴を考えてみた。それは、脳が残っていること、受傷痕があること、さらには、焼成があることである。三つの特徴を併せ持っているのは、上記７個体のうち、第８頭蓋だけであった。ちなみに、青谷上寺地遺跡出土人骨のうち、脳が残っていたのは３個体であった。その中で最も脳がよく残っていたのが第８頭蓋である。さらに、第８頭蓋はDNAの保存状態も極めて良く、母系は渡来系、父系は日本列島在来の縄文系のグループに属することが分かっている。

以上のことから、第８頭蓋を基として復顔を行った。

暮らした倭人の素顔が、科学と芸術の力によって甦った

倭人の顔を再現する ―復顔像の制作過程―

監修：坂上和弘氏（国立科学博物館）
復顔原型制作：戸坂明日香氏（京都芸術大学文明哲学研究所）

①頭蓋骨のレプリカを組み立てる。②骨の欠けた部分を補い、骨に貼り付ける粘土の厚みを示した棒を取り付ける。③粘土で咀嚼筋をつくる。④眼球をはめ込み、表情筋をつくる。⑤皮膚をつくる。⑥粘土原型の完成。⑦粘土は長期間保存できないため、プラスチック（FRP）に置換する。粘土原型をシリコンで型取って雌型をつくり、雌型にプラスチックの材料を流し込んで成形（写真は雌型を外したところ）。⑧プラスチック製模型に着色、植毛して完成。

イベント続々!!

とっとり弥生の王国 プレミアムイベントのご案内

倭人の素顔を公開！

企画展「あおや倭人伝―倭人の真実と素顔―」

青谷上寺地遺跡出土の人骨をはじめ、人骨と一緒に出土した土器なども展示し、青谷上寺地遺跡の倭人に関する最新の研究成果を紹介します。また、会期の後半には青谷上寺地遺跡出土人骨をもとに制作した復顔模型もお目見えします。

入場無料

期間 **令和3年10月23日(土)～11月7日(日)**

前半の部 〈倭人の真実〉 10月23日(土)～10月30日(土)

後半の部 〈倭人の素顔〉 10月31日(日)～11月7日(日)

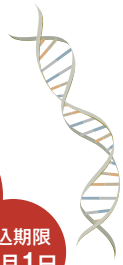
復顔模型を展示!!

場所 **鳥取市あおや郷土館**（鳥取市青谷町青谷2990-4）

復顔模型制作秘話

講演会「よみがえった倭人の素顔―青谷上寺地遺跡出土弥生時代人の復顔―」

青谷上寺地遺跡から多数出土している弥生人骨のうち、脳が残存し、DNA情報が最もよく保存されている第８頭蓋の復顔模型を制作しました。第８頭蓋の復顔を監修いただいた坂上和弘氏に、復顔技術に関する最新の知見や倭人の特徴についてご講演いただきます。



日時 **令和3年11月6日(土)**
午後１時30分～午後３時15分
講師 坂上 和弘 氏（国立科学博物館）

入場無料（定員50名）　オンラインによる聴講も受付　要申込　申込期限 11月1日

場所 **鳥取市青谷町総合支所２階多目的ホール**
（鳥取市青谷町青谷667）

参加申込 電子メール・ファクシミリ・はがき・電話（平日のみ）のいずれかで申込。
オンライン参加は電子メールで申込みください。

むきばんだ史跡公園でも倭人に会える!

出張企画展「倭人の素顔」

入場無料

むきばんだ史跡公園に復顔模型が出張します。
あわせて、青谷上寺地遺跡の最新の研究成果もご紹介します。

日時 **令和3年12月4日(土)～12月19日(日)**

場所 **鳥取県立むきばんだ史跡公園**
（西伯郡大山町妻木1115-4）

倭人のネーミングコンテスト＆そっくりさんコンテスト

まもなく開催

よみがえった倭人の名前と、倭人のそっくりさんを募集します！
詳しくはホームページをご覧ください。

申込・問合せ先
鳥取県地域づくり推進部文化財局とっとり弥生の王国推進課青谷上寺地遺跡整備室
〒689-0592 鳥取市青谷町青谷667番地　鳥取市青谷町総合支所２階
TEL. 0857-85-5011　FAX. 0857-85-5012
ホームページ　https://www.pref.tottori.lg.jp/aoyakamijichi/
電子メール　tottori-yayoi@pref.tottori.lg.jp

史跡

青谷上寺地遺跡

弥生時代に日本海を行き交う人びとで賑わった海辺の村。他に類をみない優れた品々が出土することから、「地下の弥生博物館」とも呼ばれています。

収蔵展示室＆発掘調査の見学！

とっとり弥生の王国推進課 青谷上寺地遺跡整備室

〒689-0592
鳥取県鳥取市青谷町青谷667 鳥取市青谷町総合支所２階
☎ 0857-85-5011
HP https://www.pref.tottori.lg.jp/yayoi-suishin/

収蔵展示室

収蔵庫の中にならべられた木製品や土器など、
本物の出土品を間近に見学できます。

営 午前９時～午後５時（入室は午後４時30分まで）
料 無料
休 土・日曜日、祝日、年末年始（12月29日～１月３日）
交 山陰自動車道青谷ICより３分
山陰本線JR青谷駅より徒歩約10分
P 有（鳥取市青谷町総合支所の駐車場をご利用ください）

収蔵展示室

発掘調査の見学

発掘調査期間中は、連日、発掘現場を公開しています。
もしかすると、重大な発見に立ち会えるかも？
（令和３年度の発掘調査は終了しました。）

料 無料
休 土・日曜日、祝日、雨天の日など
（詳細は青谷上寺地遺跡整備室にお問い合わせください）
交 青谷上寺地遺跡整備室、青谷上寺地遺跡展示館にて御案内します。

発掘調査

弥生時代の人びとの暮らしや技術を見学、体験！

青谷上寺地遺跡展示館

〒689-0501　鳥取県鳥取市青谷町青谷4064
☎ 0857-85-0841
HP http://www.tbz.or.jp/kamijichi/

弥生時代の土器、木製品、鉄製品、そして人骨などを展示。
青谷上寺地遺跡の魅力を紹介。ものづくりなどの体験もできます。

営 午前９時～午後５時（入館は午後４時30分まで）　料 無料
休 月曜日（祝日の場合は開館）、祝日の翌日、年末年始（12月29日～１月３日）
※その他展示替えによる臨時休館あり
交 山陰自動車道青谷ICより２分　山陰本線JR青谷駅より徒歩約３分
P 有（大型バス２台駐車可）

展示室

史跡

妻木晩田遺跡

鳥取県西部にある日本最大級の弥生集落跡。弥生時代の村の景観を体感できる
「弥生のフィールドミュージアム」。弥生体験メニューの豊富さも全国屈指！

甦る弥生の国邑

鳥取県立 むきばんだ史跡公園

〒689-3324
鳥取県西伯郡大山町妻木1115-4
☎ 0859-37-4000
HP https://www.pref.tottori.lg.jp/mukibanda/

令和３年度は11月に「むきばんだフェスタ」を開催!! いろいろなイベントが目白押しです。
詳しくはホームページでご確認ください。

営 午前９時～午後５時（入場は午後４時30分まで）
料 無料
休 第４月曜日（その日が祝日の場合は翌日）、年末年始（12月29日～１月３日）
交 山陰自動車道淀江ICより５分　山陰本線JR淀江駅より徒歩約40分
P 有（大型バス３台駐車可）

本物の竪穴住居跡を常時見学できます

弥生時代の技術・材料にこだわって再現された弥生の村

とっとり弥生の王国　2021 Autumn

特集　続・倭人の真実

2021（令和３）年10月30日 発行
発行　鳥取県